

1962年

〔昭和37年〕

昭和37年1月4日 地震

13時35分頃、県下をはじめ西日本各地にかなり大きい地震があった。震源地は紀伊水道、震度IV徳島、最大振幅6mmを記録、徳島地方気象台では13時46分県南・紀伊水道に対し、津波のおそれがあるとの津波警報を発令した。(解除は14時2分)

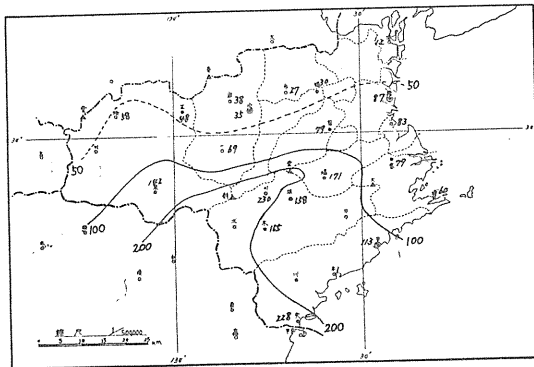
昭和37年2月～3月 寡雨、異常乾燥

2月から3月にかけて寡雨の状況が続き、2月の降水量は僅か12.6mm(平年62.9mm)、また、3月も32.1mm(平年97.0mm)に過ぎず、両月とも少雨の順位は1893年(明治24年)気象台開設以来第2位の記録となった。(以下「開設以来」という。)

2月の第1位は昭和35年 12.4mm
3月の第1位は昭和32年 31.5mm

このため那賀川上流の長安口ダムは底をつき、この地方の杉苗1万本が全滅、20万本が枯死寸前となった。そのほか異常乾燥で火災が続発し、県下で1日4件の火災が発生した。

昭和37年4月3日 大雨(低気圧)



雨量分布図

2月から3月にかけて発達した低気圧が日本海を通り風雨が強まった。海の足は大混乱、国鉄土讃線は岩原 - 豊永間で土砂崩れが起き列車の運行はストップ、鳴門市大津、阿南市長生では河川の増水で堤防が決壊寸前となり、地元民百数十人が水防作業のため出動し、応急作業を行った。

昭和37年4月21日 降ひょう

寒冷前線が日本海から西日本に南下して、激しい上昇気流を起こし、これに伴って西日本各地に落雷があり雹を降らせた。

中でも広島で降った雹の直径は15mmの大粒のものであった。県内でも16時過ぎ阿波・

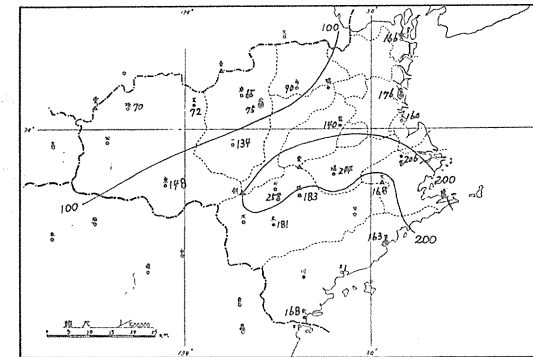
板野両郡一带に直径10mmの雹が20分間にわたり降り、葉煙草、桑、果樹に相当の被害があった。

昭和37年5月3日 列車衝突

21時35分頃、東京都荒川区三河島3の2837常盤線三河島駅～南千住駅間で貨物列車が脱線したところへ上野発取手下行り国電が衝突し、前2両が上りの線路上に転覆した。そこへ上り線を進行してきた取手発上野行が転覆していた国電に二重衝突、このため大惨事となり多数の死傷者がでた。

死者158、負傷者385

昭和37年6月9日～10日 大雨(梅雨前線)



雨量分布図

7日から本邦南沖に北上してきた梅雨前線は9日から10日未明にかけてさらに活動が活発となり西日本一帯集中豪雨により被害が続出したが、県内でも、南部で200mm、その他の各地で100mm前後の大雨を降らせ、海部郡内や那賀川上流域の各地で山崩れが起きた。またこの雨は14日まで続いたが、14日11時過ぎ阿南市長生町のトン

ネル工事現場で降雨のため地盤がゆるみ落盤事故が発生、16人が生き埋めとなり、9人が脱出し助かったが7人は犠牲となった。

昭和37年7月27日 台風7号

26日未明、台風7号は北緯30°線を越えて北西に進み、四国上陸の恐れ強しとみて厳重な警戒にあたったが27日3時頃紀伊水道南方で進路を北から北東に転じ同日13時過ぎ紀伊半島に上陸、やや衰えながら北北東に進んだ。27日午後徳島県東部も暴風圏に入ったが、台風の中心が本県東部を通ったため被害はなかった。

昭和37年8月21日 台風13号

21日九州西部に上陸後衰弱して瀬戸内海西部を通り、日本海沿岸に沿って北東に進んだが徳島県への影響は無く俄雨が降った程度であった。

昭和37年8月26日 台風14号

A級に発達した台風14号は南方海上を北上し、26日三重県に上陸したため、中部地方では死傷者不明併せて29人を出した。

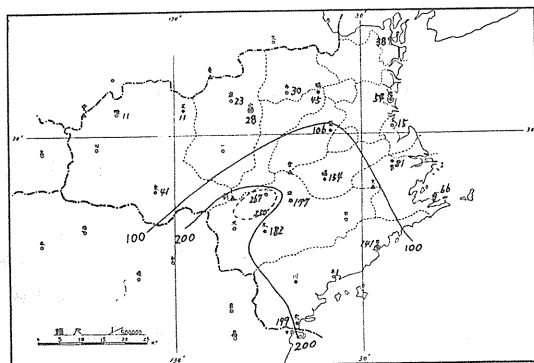
昭和37年8月28日 台風15号

28日九州南部に上陸した台風15号は急速に衰えたため、徳島県への影響は全くなかった。

昭和37年9月～10月 干 害

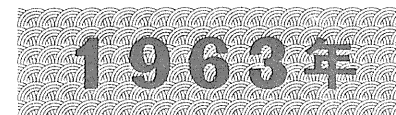
9月～10月は台風の影響は全くなく深刻な水不足となった。例年は9月に入ると太平洋高気圧がそろそろ東に退き始めるのだが、本年は本邦上空に固い壁を作って台風を近よらせず、また10月は台風が本邦はるか東方洋上を北東進して影響がなかった。このため降水量は9月49.5mmで平年の5分の1、10月は52.0mmで平年の4分の1程度しかなく深刻な水不足となったため電力は底をついた。また、阿波郡を中心とする吉野川北岸地区では農作物の干害が続出し、陸水稻、野菜、果樹に及ぶ被害額は2億5千万円にのぼった。

昭和37年11月2日～3日 大雨(低気圧)



雨量分布図

2日おそくから3日にかけて低気圧が黄海から朝鮮海峡を通して日本海に入り発達したので風雨が強く吹き荒れた。降水量は県南ほど多く、海部川では250mm、那賀川では150mm、その他では50mmに達する大雨となった。



[昭和38年]

昭和38年1月 豪 雪

1月中旬から月末にかけて裏日本一帯の大雪は昭和38年1月豪雪と命名され四国山間部まで及んだ。冬型気圧配置の持続で山間部は大雪となり交通は麻痺した。

各地の積雪 23日 一字47cm, 鬼籠野41cm
24日 徳島 8cm
27日 一字60cm
31日 一字88cm, 池田70cm, 川井76cm

昭和38年1月下旬～2月 異常乾燥

1月18日の最小湿度は徳島24%で1月としては開設以来第1位, 2月の月平均湿度は徳島62%で平年より6%低かった。

昭和38年2月 少 雨

徳島の月降水量は14.1mm平年の23%で少雨の順位は開設以来第4位であった。

昭和38年1月～3月前半 異常低温

1月の徳島の月平均気温は2.7℃で平均より2.2℃低く開設以来第3位の低温の記録となる。

1月24日の最低気温は徳島で-4.9℃, 剣山で-19.2℃で, 開設以来昭和33年の-19.8℃に次ぐ低温第2位の記録で水道管の破裂が相ついだ。

昭和38年4月14日 眉山の火災

19時30分頃, 徳島市南佐古7丁目の眉山裏山から出火し, 約3haを焼いた。

昭和38年4月15日 大雨(低気圧)

熱帯低気圧が四国沖を通過したため県南で大雨となり, 日野谷で257mm(日降水量235mm)の降雨があった。

道路決壊山崩れ 5

昭和38年4月23日 大雨(低気圧)

低気圧が四国沖を通過し県南は大雨となり, 穴喰で131mmの降雨があった。23日8時頃木沢村で山崩れがあり登校中の学童2名が生き埋めとなり死亡した。

昭和38年5月1日 濃 霧

9時20分頃, 淡路島南淡町の山中に日東航空の「つばめ号」が霧で視界を奪われ墜落した。

死者9, 負傷者2

昭和38年5月28日 濃 霧

13時半頃濃霧のため友ヶ島水道で阿根航路あきつ丸996tと福代丸1,562tが衝突, 船体が破損し航行不能となる。

負傷者16

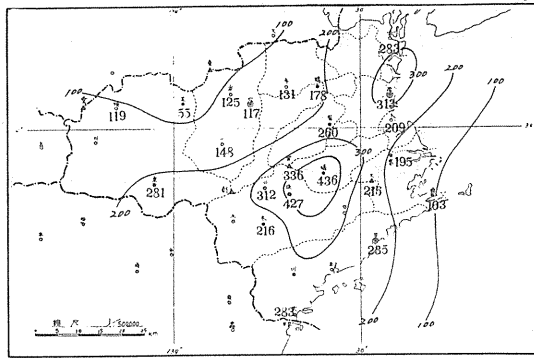
昭和38年4月下旬～6月中旬 長 雨

大陸からの移動性高気圧はやゝ北偏して通り, 低気圧や前線が本邦や南岸に停滞しやすく, 曇雨天が続き, 5月に入ってからは梅雨期の様相を呈した。このため農作物特に麦類に被害が大きかった。

昭和38年5月 高 温

徳島の5月, 月平均気温は19.1℃で平年より1.4℃高く, 高温順位は開設以来第2位を記録した。

昭和38年6月2日～5日 台風2号による前線豪雨

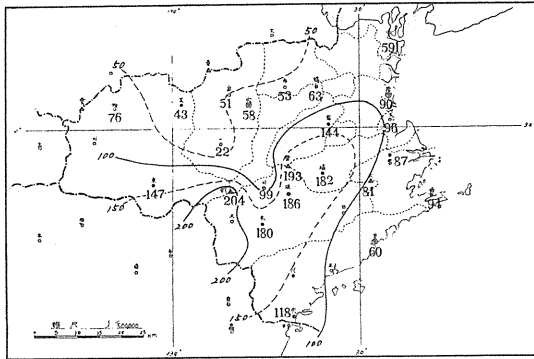


雨量分布図

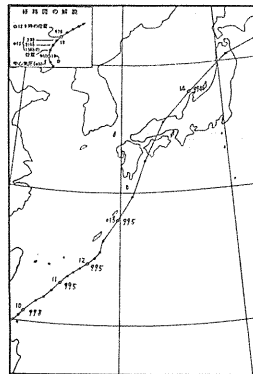
台風2号が本州南岸沖を北東進し、梅雨前線を刺激して大雨を降らせた。徳島では4日に244.7mmと6月の日降水量の記録を更新した。福原旭2～4日の総降水量436mm

床上浸水 749
床下浸水 5,316

昭和38年6月13日 台風3号による水害



雨量分布図



経路図

13日朝奄美大島付近に達した台風3号は次第に速度を早め22時頃宿毛市付近に上陸、14日3時頃鳥取付近を通り日本海に入ったが、徳島ではSSE21.7^m/sの強風、剣山で12～13日に204mmの降水量を記録した。

死者1, 床上浸水10, 床下浸水65, 山崩れ13

昭和38年6月下旬 高温

台風4号が北上し日本海を通過したのち、西日本は南方海上にある高気圧の勢力下に入り気圧は上昇し、特に26日は徳島では34.6℃と6月としては極高を記録した。

また、6月の月平均気温は23.0℃で平年より1.4℃高く、高温の順位は開設以来第3位の記録となった。

昭和38年6月 多雨

台風2号、3号などの影響も加わり雨量は多く、月降水量は徳島517.5mm、剣山920.0mmと何れも開設以来の記録を更新し第1位となった。

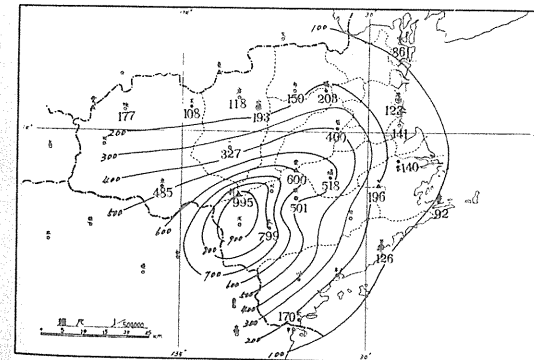
昭和38年7月30日 地震

17時28分頃紀伊水道を震源地とする地震で徳島は震度Ⅲを観測した。

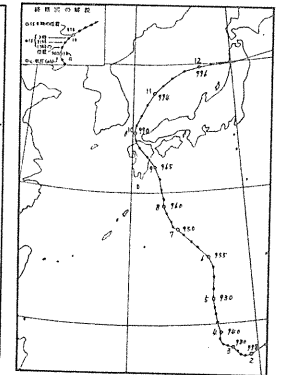
昭和38年7月 少雨

後半の雨量は少なく、月降水量は47.7mmで平年の24%となり少雨の順位は開設以来第4位であった。

昭和38年8月9日～10日 台風9号



雨量分布図



経路図

マリアナ東方海上に発生した熱低は次第に発達し台風9号となり、8月9日13時すぎ宮崎・大分県境に上陸し中心気圧970mbで北西～北北西進を続け、10日9時には山口県萩沖に達し勢力は衰えた。県下は暴風雨圏内に入り、剣山では7～11日の総降水量は1,015mm、徳島では123mmを記録した。

家屋全壊2, 半壊2, 床上浸水64, 床下浸水239

昭和38年8月17日 客船の転覆, 旅客機の遭難

正午頃、沖繩本島の西20数kmの慶良間諸島沖合で乗客246人を乗せた那覇久米島航路連絡船「みどり丸」(302t乗組員15名)が沈没し全員が海中に投げ出された。このため付近を航行中の船舶が救助に当たるとともに米軍と那覇警察署が捜索を行ったが、通報の遅れもあり多数の犠牲者が出た。

現場は海の難所として名高い所であり、当日は波浪注意報が発令されていた。

生存者143, 死者75, 行方不明43

また、この日は八丈島飛行場を14時48分に飛び立ったヘロン機が離陸直後八丈富士に激突し乗組員19人全員が死亡した。

昭和38年8月25日 雷 雨

低気圧が日本海を北東進し、前線が通過したため県東部一帯に激しい雷を伴った強雨があった。徳島の降水量66mm。

床下浸水(小松島市) 350

1964年

[昭和39年]

昭和39年1月 高 温

季節風は弱く、月平均気温は 6.9°C で平年より 2.0°C 高く高温の順位は開設以来第4位であった。

昭和39年2月24日 大 雪

低気圧が四国沖を通過したため大雪となった。このため県下のバスは麻痺の状態となり、また促成野菜に大きな被害があった。

徳島の積雪 9cm 、25日9時までの積雪 川井 30cm 、 福原旭 20cm

昭和39年3月8日 強 風

発達した低気圧が関東沖に抜け、強風が吹き荒れたため鳴門海峡で阿南の機帆船が転覆し4名が死亡した。

徳島の最大風速 WNW 14.0m/s 、最大瞬間風速 WNW 24.6m/s

昭和39年3月下旬後半～4月下旬 異常高温

4月の月平均気温は 17.4°C で平年より 4.2°C も高く、高温の順位は開設以来第1位であった。

昭和39年4月30日～5月1日 大 雨(低気圧)

東支那海に発生し、朝鮮海峡から日本海に抜けた低気圧の影響で県南は大雨となった。

川上 268mm 、 山崩れ2

昭和39年5月 高 温

月平均気温は 19.2°C で平年より 1.5°C 高く、高温は順位は開設以来第2位の記録となった。

昭和39年6月2日～3日 強 風

東支那海にあった低気圧が発達しながら北東に進み日本海に入ったため、2日午後から3日午前にかけて南寄りの風が強まり、徳島では3日4時40分にSE 19.5m の最大風速を記録、また最大瞬間風速は同3時49分にSE 26.8m/s を観測した。

昭和39年6月16日 新潟地震

新潟県粟島付近を震源地とする地震が13時1分頃に発生した。地震の規模はマグニチュード7.7で、震度は新潟県酒田地方が最も強く震度Vで、局地的には震度VIのところもあった。被害は新潟市を中心に激甚を極めたため国は非常災害対策本部を設置し、被害状況の収集、応急対策等に全力をあげた。

この地震の被害の特徴としては

- (1) 流砂現象による被害
- (2) 低地浸水による被害
- (3) 石油タンク火災による被害

等があげられるが、特に石油等危険物を大量に貯蔵するコンビナート地帯においてタンクが次々と炎上し、延べ5日間に渡って燃え続けたことは、過去の地震においてみられなかった新しい災害原因としてクローズアップされた。

死者29、 負傷者510、 家屋の全壊3,557、 半壊1,2237

被害総額2490億円

昭和39年8月23日～24日 台風14号

この台風は迷走台風といわれたように反時計廻りに2回もループを描き複雑なコースをとり、ゆっくり北上し23日正午頃枕崎市付近に上陸、九州を斜断して24日午前伊予灘に入り、愛媛県西部から瀬戸内海に入り、岡山県・兵庫県北部を経て、24日22時頃日本海に抜けた。

徳島県は暴風雨圏内に入り、徳島市での最大風速SSE 20.3m/s 、総降水量 51.8mm 、木頭では総降水量 552.0mm を観測した。

非住家被害3、 水田冠水 35ha 、 道路損壊7、 山崩れ7

昭和39年8月 高 温

太平洋高気圧が北偏して本邦をおおい、15時頃には強い高気圧の峰が本州中央部を東西に延びていた。

このため13日から15日は空気が乾燥し高温となった。徳島8月14日 35.4°C 、月平均気温 28.0°C で平年より 1.5°C 高く開設以来第5位、剣山では月平均気温 16.1°C 第2位であった。

昭和40年1月24日 大麻町の山火事

14時20分頃、板野郡大麻町姫田の宮尾神社の裏山から出火、火は15時間にわたって燃え続け、山林約70haを焼いた。
被害額約3千5百万円(大麻町役場調べ)

昭和40年3月16日 大雨, 強風(寒冷前線)

16日午後、強い寒冷前線が四国地方を通過し強風と大雨を伴った。兵庫県、大阪府南部から奈良県にかけては記録的な大雪となった。また強い雷を伴い大竜寺山の杉と無線柱に落雷し3時間にわたり延焼した。阿南市では小豆大、木頭ではラムネ玉大の降雹があり葉タバコに被害が発生した。剣山では雪崩が発生し測候所の大谷技官が遭難した。
徳島では日降水量104.6mm, 最大瞬間風速SE32.0mは何れも3月の記録を更新して、開設以来第1位となった。

昭和40年3月中旬~下旬 異常乾燥

移動性高気圧が西日本をおおうことが多く、特に12日、15日、19日、23日および30日は空気が乾燥した。
19日の徳島の最小湿度は12%で記録を更新し、開設以来第1位となった。

昭和40年4月 低 温

3月に続き4月も全般に低温で、4月の月平均気温は12.0°Cで平年より1.2°C低く、低温の順位は開設以来第3位であった。

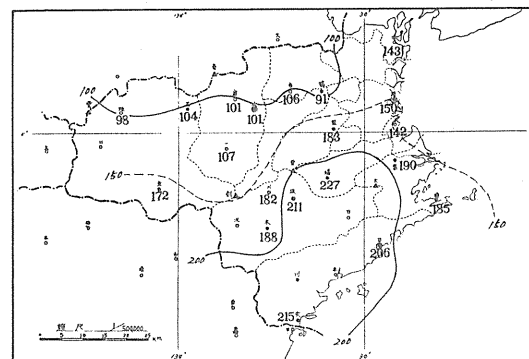
昭和40年5月3日 大 雨(低気圧)

上海の南に発生した低気圧が発生しながら四国沖を通り大雨を降らせた。
3日徳島の日降水量は89.5mmで開設以来第4位、剣山の日降水量は82.5mmで第5位であった。

昭和40年5月20日~22日 放 射 能

5月14日に中国で核実験が行われ全国的に大気中の放射能が増えた。2日には大阪で塵から28.0マイクロマイクロキュリー、雨水から2.1マイクロマイクロキュリーを検出した。

昭和40年5月26日~27日 大 雨(台風6号)



雨量分布図

台風6号が四国のはるか南海上を北東進し、四国沖の前線を刺激した大雨となる、県南で200~250mmの降水量であった。
徳島の総降水量は150.0mm, 日降水量は99.3mmで開設以来第2位であった。
床下浸水12,
田冠水20ha,
道路11,
山崩れ3

昭和40年5月 多 雨

5月は西日本全般に雨量が多く、徳島の月降水量は383.7mmで平年の3倍となり、開設以来第1位であった。

昭和40年6月5日~10日 異常乾燥

移動性高気圧が带状となり、本州を5日から10日までおおったため好天が続き空気は乾燥した。
9日の徳島の最小湿度は27%で月順位は開設以来第1位、10日に剣山では14%で第2位を記録した。

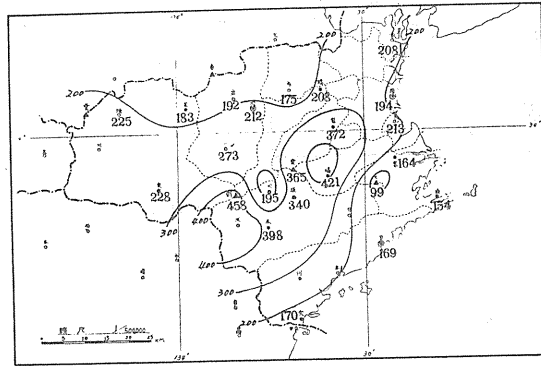
昭和40年8月6日 強 風(台風15号)

沖縄の西方海上から北東進した台風15号は6日4時過ぎ熊本県に上陸し、周防灘に入り山口県を通り12時に日本海に抜けた。
徳島県の最大風速SSE16.7m/s, 降水量9.3mm, 雲早山で総降水量15.1mmで当県への影響は弱かった。
山崩れ1

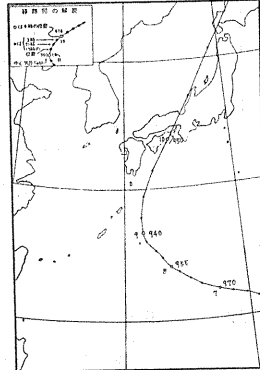
昭和40年8月 少 雨

台風15号の影響も小さく、太平洋高気圧におおわれ、中旬にはオホーツク海から南下した高気圧が温暖高気圧に変わり、この高気圧圏内で好天が続き高温、小雨で乾燥した。徳島の月降水量は18.1mmで平年の11%に当り、開設以来第4位の少雨となった。

昭和40年9月10日 暴風雨(台風23号)



雨量分布図

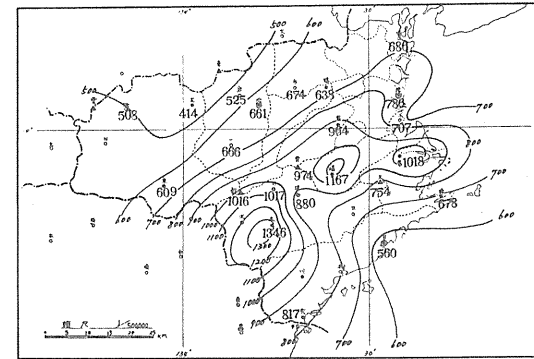


経路図

10日8時過ぎ安芸市付近に上陸した台風23号(950mb)は早い速度で北上し12時過ぎ若狭湾に抜けたが、県下では暴風雨時間が短いにもかかわらず大きな被害が発生した。徳島最大風速SE35.8m/s、最大瞬間風速67m、総降水量194mm、県内最大降水量 剣山458mm

死者5、負傷者61、行方不明1、家屋全壊263、半壊572、床上浸水173、床下浸水7024、一部破損住家18388、非住家2429、田流失、埋没18ha、田冠水1495ha、畑流失、埋没60ha、畑冠水942、道路破壊36、山崩れ59、橋流失5、堤防決壊4、鉄道2、通信4686回線、船沈没17、破損15、罹災世帯1030、罹災者4313

昭和40年9月13日~18日 大雨(台風24号と前線)



雨量分布図

沖縄の南方海上で北東に向を変えた台風24号は紀伊半島の南海上を通過し、17日21時30分頃志摩半島に上陸、本州中部から北日本を通過した。この台風が本州のはるか南方海上にある13日午後から本州付近に停滞していた前線を刺激し、17日夜まで長期間にわたり強い雨を連続降り続けさせ徳島、岐阜、福井各県に豪雨をもたらし、

開設以来786mmの記録的大雨を観測した。台風23号の記録的暴風雨の直後に来襲したため被害は倍加された。剣山南東斜面では1200mmを超える総雨量となり、木頭では1346mmを記録した。

徳島最大風速WNW16.7m/s、最大日降水量364.7mm

死者6、負傷者12、行方不明3、家屋全壊9、半壊14、流失4、床上浸水3365、床下浸水22948、一部破損住家6、非住家99、田流出、埋没11ha、畑3ha、田冠水5014ha、畑1355ha、道路損壊72、山崩れ141、橋流失5、堤防決壊14、鉄道8、通信1023回線、木材流出20600m³、罹災世帯3394、罹災者14321

昭和40年9月 多 雨

9月は前線活動が活発で雨の日が多く、また台風23号・24号の来襲で995.1mmと多く平年の3.9倍となり、開設以来第1位を記録した。また、剣山の降水量は1826mmで開設以来の記録を更新した。

昭和40年10月18日 高 波(台風30号)

台風30号は父島のはるか東方海上を北上していたが、高波のため18日13時頃、牟岐沖で小型漁船1~1.5tの4隻が沈没または座礁した。

昭和40年10月 少 雨

10月は空気が乾燥し、月降水量も少なく徳島は42.3mm 平年の22%となり、少雨の順位は開設以来第2位であった。

昭和40年11月9日 高 潮

低気圧が発達しながら日本海を通過し、この低気圧に向って南寄りの強風が吹き込み、大潮と重なったため、小松島の6時の潮位は30.2cm(偏差3.3cm)となったため鳴門市内で470戸床下浸水した。又阿南市内では道路が冠水した。

昭和40年12月6日 寒 波

5日から6日にかけて強い季節風が吹き、徳島では6日初雪があったが、これは平年より18日早かった。

1966年

[昭和41年]

昭和41年2月27日 大雨(四国沖低気圧)

四国沖を通過した低気圧により、季節はずれの大雨となり徳島の日降水量は70.5mmで、開設以来第3位の記録であった。

昭和41年2月 高温

冬の気圧配置は一時的で長続きせず、暖気が流入して月平均気温は7.1°Cで平年より1.9°C高く、高温の順位は開設以来第5位であった。

昭和41年3月2日~7日 高温、長雨

前線が停滞して南北に振動し、低気圧が4日と7日に通り、高温多湿の気流が流入して異常な高温、長雨となった。

4日の平均気温は15.8°Cで平年より8.9°Cも高かった。

昭和41年3月10日 異常乾燥

華中の高気圧におおわれて好天となり、徳島の最小湿度は28%で3月の新記録となった。

昭和41年3月19日~20日 強風

小型台風並みに発達した低気圧が北海道にあり、大陸から高気圧が張り出し19日の徳島の最大風速はW16.3m/sに及んだ。

昭和41年3月 高温

下旬後半は低めに経過したが全般に高く、月平均気温は10.1°Cで平年より2.0°C高く、高温の順位は開設以来第5位であった。

昭和41年5月21日~22日 大雨(低気圧, 台風)

低気圧が四国沖をゆっくり東進し、台風2号が沖繩付近から北東進し、高温多湿の空気を送り込み県南では特に大雨となり、穴喰で総降水量493mm、徳島82mmを記録した。

道路損壊2, 山崩れ10, 家屋の損壊1, 田畑冠水55ha

昭和41年6月1日 大雨(台風3号くずれの低気圧)

南支那海で発生した台風3号は北東進して6月1日6時には九州南沖に接近したが998mbの熱低に衰え、四国沖を北東進したため大した影響もなく、徳島で最大風速はENE5.3m/s, 総降水量は66mm, 南部では80mm程度の降水量であった。

山崩れ3

昭和41年6月4日 大雨(低気圧)

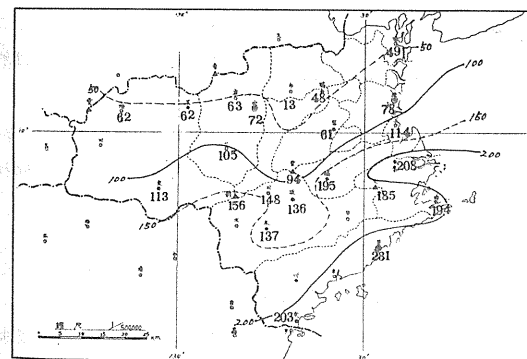
本州の南海上には前線があり、その前線上の低気圧が発達しながら東進し、徳島で日降水量73.9mm, 穴喰で132mm(総降水量149mm)の大雨があり、山崩れ・土砂崩れの被害が発生した。

昭和41年6月9日 強風雨(梅雨前線)

台湾付近で発生した低気圧は梅雨前線とともに北上して九州南岸で996mbに発達し本州南岸を東進した。

徳島では最大風速NNW13.0m/s, 日降水量85.1mm, 県南で総降水量100mm前後の雨量があり、山崩れなどの被害があった。

昭和41年7月1日~2日 大雨(梅雨前線)



雨量分布図

上海付近に発生した低気圧は発達しながら東進し四国地方を通過し、梅雨前線の活動が活発となり大雨を降らせた。

総降水量 日和佐231mm, 徳島78mm

床下浸水190, 非住家被害2, 田畑冠水120ha, 道路損壊16, 山崩れ15, 鉄道1

昭和41年7月3日～6日 異常乾燥

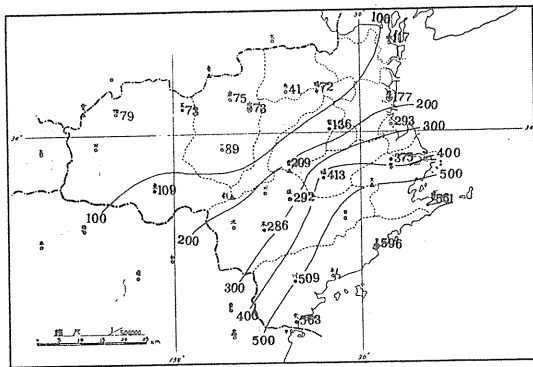
発達した低気圧が去り、梅雨前線が南海上に南下した後、4日は移動性高気圧が日本海に入り好天となり空気は乾燥した。

4日の徳島の最小湿度は32%で極値を更新した。

昭和41年7月7日～9日 大雨(梅雨前線)

南下していた梅雨前線は北上をはじめ、7日には前線上の低気圧が日本海に入り992mbに深まり、前線活動も活発となって剣山で総降水量396mm、徳島103mmの大雨となり、山崩れなどの被害が発生した。

昭和41年8月13日～15日 大雨(台風13号と前線)



雨量分布図

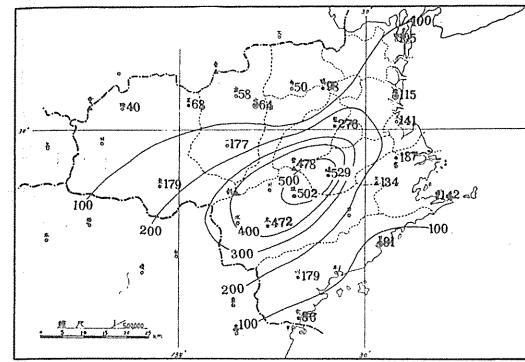
床上浸水20, 床下浸水449, 非住家2, 田冠水259ha, 畑冠水15ha, 道路損壊3, 山崩れ9, 罹災世帯21, 罹災者85

昭和41年8月13日～21日 異常潮位(高潮)

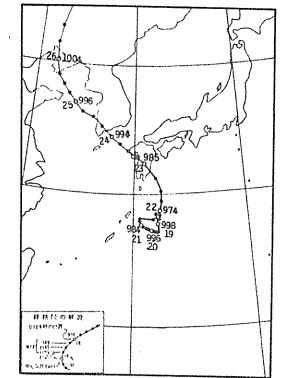
13日午後から21日まで異常潮位が続き、特に18日朝の満潮時には鳴門市で床下浸水72戸、阿南市で床上浸水15戸、床下浸水100戸(徳島新聞調)の被害があった。原因は日本海を発達した低気圧が通過したことや東支那海の台風13号による雨よりの強風と大潮が重なったためと考えられる。

18日 6時40分 小松島潮位 322cm

昭和41年8月22日～24日 大雨(台風15号)



雨量分布図



経路図

奄美大島の南東海上で発生した台風15号はゆっくり北上して23日7時頃宮崎市付近に上陸、九州を斜断して朝鮮海峡へ入ったが 福原旭529mm, 坂州502mm, 徳島115mmと多量の雨を降らせた。徳島最大風速SSE17.7m/s, 最大瞬間風速SE28.7m/sであった。

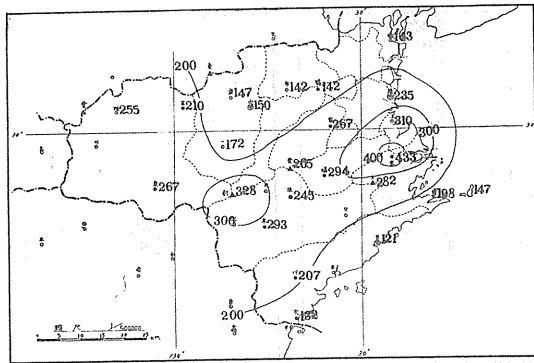
家屋半壊1, 非住家1, 床下浸水41, 田冠水3ha, 山崩れ

昭和41年9月9日 強風雨(台風19号)

沖の鳥島の東海上で台風となった19号は北上して豊後水道を(980mb)で通過し、広島県東部に上陸、鳥取県東部を経て日本海に入った。徳島最大風速SE18.0m/s, 総降水量40mm, 県内最多降水量は雲早山254mmであった。

道路損壊1, 山崩れ2

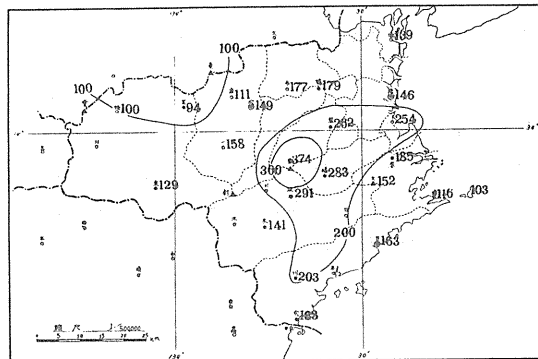
昭和41年9月16日～19日 大雨(台風21号くずれの低気圧)



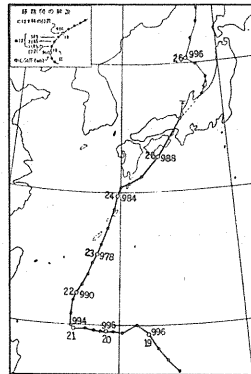
雨量分布図

ルソン島の西方から北東進した台風21号は奄美大島の北方海上で温低となり、四国沖に停滞していた前線を刺激し県下全域に大雨を降らせた。総降水量は徳島235mm、富岡433mm、剣山328mm、徳島最大風速WNW 8.7m/s
家屋半壊1、非住家1、床上浸水13、床下浸水897、一部損壊1、田冠水286ha、道路損壊7、堤防決壊1、山崩れ10、鉄道1

昭和41年9月23日～25日 強風雨(台風24号)



雨量分布図



経路図

沖縄の東海上を北上した台風24号は25日11頃高知県安芸市付近に上陸(990mb)し、県西部を通過して淡路島の西方を北東に進んだ。

四国沖に停滞していた前線の活動が活発となり大雨となった。

雲早山の総降水量は374mm、徳島では146mm、徳島の最大風速はSSE 15.7m/sであった。

死者2、床下浸水32、非住家1、田冠水28ha、道路損壊7、山崩れ7、堤防決壊7

昭和41年10月12日 大雨(二つ玉低気圧)

二つ玉低気圧の通過で県南部では200～250mmの大雨となり、徳島市内では落雷のため停電した。

徳島日降水量88.8mm、川上総降水量253mm
床下浸水30(徳島新聞調)

昭和41年10月25日～26日 大雨(低気圧、前線)

低気圧がゆっくり山陰地方を通過したが、前線が四国沖に停滞したため天気はぐずつき、暖湿気流の流入で雷が発生、突如では433mmの大雨となった。また、徳島の総降水量は92mmであった。

床下浸水3、道路決壊3、山崩れ1、鉄道1

昭和41年11月5日 異常乾燥

移動性高気圧の中心が瀬戸内を東進したため、空気の乾燥は著しく、徳島の最小湿度は29%で極値を更新した。

昭和41年12月28日 放射能

中国は28日に西部地区で5回目の大気圏内核爆発実験を行った。このため日本では数日間、塵埃や雨水により放射能が降下した。

1967年

[昭和42年]

昭和42年2月 少 雨

気圧の谷は5日周期で西日本を通過したが何れも弱く、徳島の月降水量は9.6mmで平年16%にあたり少雨の順位は開設以来第2位であった。

昭和42年4月6日 黄 砂

北西流に乗って飛来した黄砂が徳島で観測された。

昭和42年4月8日～20日 長 雨(菜種梅雨)

8日から9日にかけて低気圧が日本海と本州南岸を東進し、その後前線が西日本付近に停滞し連日のように雨を降らせ異常な長雨となった。総降水量 徳島150mm, 川上347mm

昭和42年4月11日 バネッサ号流出油事故

未明阿南市椿泊町の刈又崎灯台の北西海岸付近でスウェーデンの貨物船バネッサ号(2,701t 乗組員34人)が座礁し、船底の一部が破損、燃料用重油150tが海上へ流出した。県下の船舶の航行の増加に伴う海上の安全対策が見直される契機となった。

昭和42年4月28日～29日 大 雨(低気圧)

28日から29日にかけて南海沿いに前線が停滞し、低気圧が四国沖を通過したため大雨となった。川上では日降水量209mm 総降水量381mm

昭和42年4月 多 雨

上旬・中旬とも雨の日が多く、菜種梅雨の現象が顕著で月降水量は255.5mmで平年の193%となり、多雨の記録は開設以来第2位となった。

昭和42年5月1日 高 温

日本海の低気圧に向って南寄りの暖かい風が吹き込み、徳島では30.8°Cとなり、7月下旬の気温極値を更新した。

昭和42年5月4日～5日 異 常 乾 燥

2月から5日にかけて西日本は移動性高気圧におおわれ晴天が続き空気は乾燥した。4日徳

島の最小湿度は12%で、5月としての最小記録であった。

昭和42年5月9日～10日 大 雨(低気圧)

九州北部から四国、紀伊半島南岸を通った低気圧により県南部では大雨となり、日和佐では日降水量278mm, 時間降水量は75mmを観測した。

昭和42年5月28日～29日 降 ひ よ う

深い気圧の谷が強い寒気を伴って通過したため、大気不安定となり28・29日の両日各地で降ひょうを伴う強い雷が発生した。28日14時剣山付近で直径5mm, 高越山で直径2cmの降ひょう, 29日2時頃から未明にかけて吉野川流域で発生した強い雷雨に伴って美馬郡一帯に降ひょう, 脇町では直径3cmの雹が50cmも積ったと云われ午後になっても溶けなかった。昼過ぎから県内各地で発雷、降ひょうがあり、雹の大きさは剣山、穴吹で直径7cm, 坂州で小豆大, 神山で2cm, 葉煙草・桑・野菜・果樹にかなりの被害が発生した。

屋根瓦破損30, 有線電話障害30回線, 電灯・電力線5ヶ所(徳島新聞調)

昭和42年5月～6月 高 温

4月の終り頃からの高温傾向は6月まで続いた。5月の徳島の月平均気温は19.5°Cで平年より1.8°C高く気象台開設以来の記録となり、また6月の平均気温は22.8°Cで平年より1.2°C高く、高温の順位は開設以来第5位となった。

昭和42年6月9日～10日 大 雨(低気圧)

低気圧が四国の南海上を東進したため県南で大雨となり、川上では日降水量255mm, 総降水量304mm, 徳島の総降水量は20mmであった。

昭和42年6月11日 徳島名店街のビル火災

6時過ぎ徳島駅前名店街(29業者35店)から出火、鉄筋コンクリート2階建て一部4階(延べ床面積1,983㎡)のうち、1～2階の店舗(延べ面積1,793㎡)を全焼し、9時30分頃鎮火した。県下初の大規模ビル火災は都市構造の変貌に伴う今後のビル火災の防災対策面で大きな課題を残すことになった。

被害額 約8千万円(徳島市消防本部調)

昭和42年6月16日 降ひょう

15時頃、三野町で大豆大の降ひょうがあり、葉煙草に被害があった。

昭和42年6月19日 地震

13時58分頃、徳島で震度Ⅲの局地地震が発生した。震源地は紀伊水道で深さは30kmであった。

昭和42年6月 少雨(干ばつ)

梅雨入りは平年より1週間程遅れ、大きな雨もなく、徳島の降水量は47.5mm(平年の23%)で少雨の順位は気象台開設以来第1位の記録となり、水稻を中心に干害が広がった。

昭和42年7月7日～10日 大雨(昭和42年7月豪雨)

九州北部から関東地方にまたがる広範囲に大雨が降り大被害が発生した。台風7号崩れの低気圧が九州北部から瀬戸内を通り、西日本に停滞していた梅雨前線を刺激し剣山周辺で400mmを超える大雨となった。

総降水量 剣山436mm, 徳島73mm, 時間降水量は椿泊で100mm, 木頭93mmなど記録的な大雨があり、日降水量の最大は木頭の337mmであった。

死者3, 家屋全壊4, 半壊8, 流出2, 床上浸水5, 床下浸水41, 非住家2, 田冠水323ha, 畑冠水10ha, 道路11, 山崩れ27, 鉄道3, 船流失2, 小舟流失13, 罹災世帯14, 罹災者38

昭和42年7月中旬～10月下旬 少雨(干ばつ)

6月は干ばつ傾向に経過したが7月上旬の大雨で干ばつも終止符を打った。梅雨明け後は西日本は再び干ばつに見舞われ10月27日の台風34号による大雨まで干ばつが続き、特に九州と中国・四国の瀬戸内沿岸は大きな干害を受けた。徳島県内でも鳴門市内の簡易水道が断水するなど農作物、果樹に被害がでた。

徳島の7月11日から10月25日までの総降水量は170mmで、8月の月降水量は31.9mm(平年の19%), 9月の月降水量は55.4mm(平年の22%)で何れも非常に少なく、9月は少雨の順位が開設以来第2位であった。

昭和42年8月 高温

8月の月平均気温は西日本全般に高く、徳島では28.2°Cで平年より1.7°C高く、高温の順位は開設以来第5位であった。

昭和42年9月5日 大雨(前線)

前線通過のため、5日3時から約1時間、鳴門市の中心部に約35mmの局地的な大雨があった。

床下浸水60 (徳島新聞調)

昭和42年10月13日 大雨(寒冷前線)

低気圧が寒冷前線を伴って日本海を北東進し、この前線の通過で富岡では日降水量154mmの大雨があったが、干天続きで恵みの雨となった。

昭和42年10月27日～28日 大雨(台風34号)

沖縄の南海上から北東進し28日3時30分頃、愛知県伊良湖岬に上陸した季節はずれの台風34号の影響で停滞していた秋雨前線の活動が活発となり、25日夜半から28日朝まで雨が降り続き、県東部で200～250mmの総降水量があり、濁水でなやむ西日本では終止符を打った。

徳島最大風速NW16.8m/s, 日降水量163.3mm, 総降水量179.8mm

家屋全壊2, 半壊5, 一部損壊1, 非住家全半壊25, 床下浸水141, 道路損壊3, 山崩れ6, 橋流失1, 鉄道2, 通信2回線, 罹災世帯7, 罹災者27

又、小松島港内に仮係留中の外材約4900本が強風と高波で港外に流失、養殖ノリに大被害を与えた。

昭和42年12月28日～31日 寒波

27日夜から冬型の気圧配置となり、強い寒波が来襲した。31日の徳島の最低気温は-4.3°Cとなり、12月の日最低気温の順位は開設以来第1位となった。この間、各地に雪を降らせ、30日穴吹では15cmの積雪のため、山間部のバス等の交通機関はマヒ状態となった。

昭和42年12月 低温, 少雨

大陸高気圧が例年より発達して, しばしば強い冬型の気圧配置となり, 連日低温で経過し, 徳島の月平均気温は 5.5°C で平年より 2.2°C 低く, 低温の順位は開設以来第3位となった。また, 降水量は 5.9mm と非常に少なく, 平年の23%であった。

1968年

[昭和43年]

昭和43年2月15日 大雪(台湾低気圧)

台湾付近に発生した低気圧が発達しながら四国沖を通過し(980mb),九州から関東にまたがる南岸沿いの各地に記録的な大雪を降らせた。徳島の最深積雪は19cmあったが、水分を多量に含み総降水量は75mmとなり、気温は低く15日から22日までの8日間降り積った雪は溶けなかった。(積雪の継続日数8日は開設以来第1位の記録)この雪は昭和26年2月14日の大雪から17年ぶりの南国としては珍らしい大雪となった。

16日9時の積雪 池田55cm, 鬼籠野51cm, 芝生38cm, 電灯線・通信線は着雪のため切断, 通信は完全に杜絶し, 陸・海・空の交通は全面的にストップした。

また, 樹木・果樹の枝折れや倒木, 促成ビニールハウスの倒壊などで, 山林・農作物の被害は甚大であった。

家屋一部破損9, 非住家7, 田・畑の被害9.542ha, 通信2.177回線

昭和43年2月 低 温

関東でブロッキングが異常に発達し, 北日本の一部を除き全国的に低温で, 徳島の月平均気温は3.0°Cとなり平年より2.2°C低く, 開設以来第2位の低温の月となった。

昭和43年4月1日 日向灘地震

1日9時42分頃, 西日本一帯でかなり強い地震(M7.5)があり, 震源は日向灘の海底30kmで九州東岸, 四国, 紀伊半島の沿岸で津波があった。震度Vは宿毛, IV高知・松山, III徳島・穴吹, 津波は発震後20~30分で四国沿岸に達し紀伊水道沿岸には1時間半後に到達した。大阪管区気象台では10時00分に津波警報を発令し, 14時00分に解除した。小松島港では, 津波の第1波を10時55分に観測し, 最大全振巾は12時46分に22cm, 周期は30分であった。被害は徳島新聞によると真珠養殖イカダ, 養殖イワシに大被害が発生し, 国鉄は全線が一時ストップした。

昭和43年4月5日 降 ひ よ う

寒気を伴った気圧の谷の通過で5日21時10分頃, 鳴門市北灘町一帯に2~3分間直径2cmの降ひょうがあり, 葉煙草の一部に被害がでた。(徳島新聞調)

昭和43年5月16日 十勝沖地震

9時49分, 北海道襟裳岬の南々東約150kmに地震が発生, その規模は関東大震災に匹敵するマグニチュード7.9であった。震源地が陸地から離れていたにもかかわらず地震動は

激しく, 苫小牧では震度VI, 青森・函館・八戸などでは震度Vであった。被害は青森県を中心に北海道南部, 東北各県に及んだ。特にこの地震被害の特徴としては, 都市部よりもその周辺部に被害が顕著であったこと及び地震発生前の記録的な大雨のため山崩れ, 山津波による犠牲者が多数出たことがあげられる。

死者48, 行方不明4, 負傷者329, 家屋全壊676, 半壊2,994

昭和43年6月10日 大 雨 (低気圧)

東支那海から東進してきた低気圧が四国地方を通過したため大雨となった。日降水量は徳島58mm, 穴喰156mm, 徳島の最大風速はSE15.0 $\frac{m}{s}$
海部郡では床下浸水50, 山・土砂崩れ数ヶ所(朝日新聞調)

昭和43年6月19日 降 ひ よ う

日本海の低気圧から南西にのびる寒冷前線の通過に伴い12時30分頃, 那賀郡一帯は激しい雷雨があり, 直径1cmのひょうが30分位降り葉煙草に被害を及ぼした。

また, 徳島・小松島市内に落雷があった。(徳島新聞調)

昭和43年6月22日 降 ひ よ う

22日午後, 美馬郡真光町, 美馬町, 脇町で約20分間小豆大のひょうが降り, 葉煙草に被害があった。(徳島新聞調)

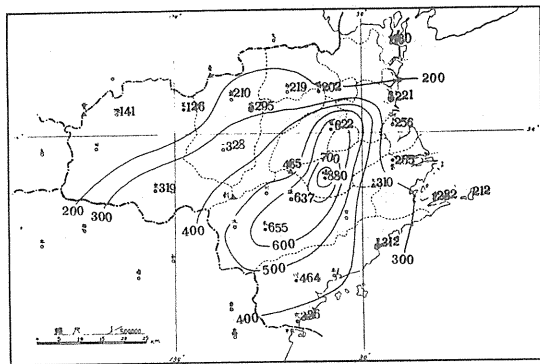
昭和43年7月2日 大 雨 (梅雨前線)

台風3号の北西に伴い, 梅雨前線の活動が活発となり強い雨が降り出し, 徳島市内で床下浸水などの被害があった。

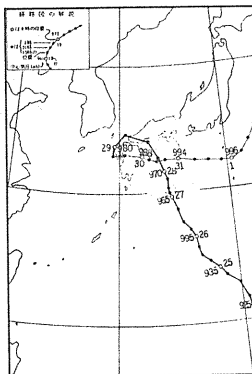
総降水量は 徳島56.5mm, 剣山203mmであった。

床下浸水10, 道路破損1, 山崩れ3

昭和43年7月28日 暴風雨(台風4号)



雨量分布図



経路図

グアム島の東方海上から北西進した台風4号は28日19時30分頃、高知県須崎市付近に上陸、松山市付近を通り浜田市西方から日本海に出た。その後九州を迂回して熱帯低気圧となって東進、土佐沖を通過して31日に東海道沖に去った。この台風は異常経路をとったため、長時間にわたって北東風が吹き、福原旭では日降水量は520mm、総降水量は880mmを観測した。徳島の最大風速SE18.2m/s、総降水量220.5mm

負傷者1, 家屋全壊2, 一部破損2, 非住家5, 床上浸水44, 床下浸水1,591, 田冠水993ha, 畑被害38ha, 道路損壊21, 山崩れ48, 鉄道1, 橋梁流失2, 通信2回線, 木材流失18m³, 船流失1, 罹災世帯46, 罹災者155

昭和43年8月6日 地震

1時17分 マグニチュード6.6の地震が発生、震源地は豊後水道で津波はなかった。震度Ⅴ 宇和島, Ⅳ 宿毛・松山・岡山, Ⅲ 徳島・穴吹

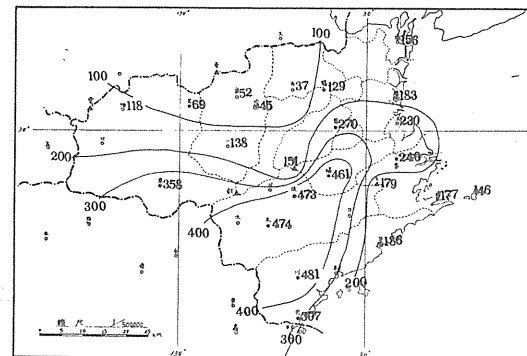
昭和43年8月16日~17日 大雨(台風7号)

夏台風特有の迷走ぶりを発揮した台風7号はウェーク島の南西海上から北西に進み、四国沖を南西進して東支那海から向きを変え朝鮮海峡を北東進した。

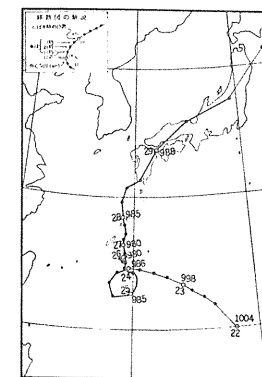
徳島の最大風速SSE12.8m/s、総降水量15mm、京上総降水量280mm

山崩れ3

昭和43年8月28日~29日 大雨(台風10号と前線)



雨量分布図



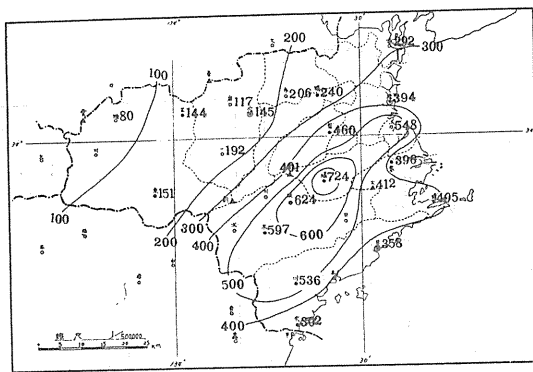
経路図

沖縄の南東海上で2~3回旋回し、28日6時頃 奄美大島付近を通過した台風10号は29日未明九州薩摩半島に上陸し、南九州を横断し岡山県に上陸、本州上を北東進した。この台風は本州南沿いに停滞していた前線を刺激し、関東以西の各地に局地的な大雨を降らせ総降水量は剣山488mm、川上481mm、徳島183mm、最大風速S20.0m/s 負傷者2, 家屋全壊1, 半壊1, 一部破損2, 非住家4, 床上浸水5, 床下浸水357, 田流失3ha, 田冠水701ha, 畑冠水106ha, 道路損壊1, 橋流失2, 山崩れ27, 船舶沈没1, 罹災世帯5, 罹災者21

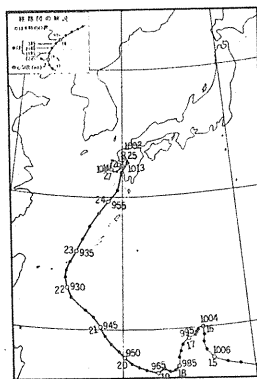
昭和43年9月13日~14日 大雨(低気圧)

黄海南部を東進した低気圧は九州北部から四国を経て紀伊半島南岸に進んだ。県南部の日和佐、椿泊では日降水量177mmを観測した。徳島の総降水量72mm

昭和43年9月25日～27日 台風16号(第3宮古島台風)



雨量分布図



経路図

台風16号は宮古島付近で中心気圧930mbまで下がり、付近一帯で猛威を振り大被害をもたらせた。その後衰弱しながら北東進し九州薩摩半島に上陸し、九州西岸を北西した。
 徳島最大風速SE12.5m/s, 日降水量178mm, 総降水量394mm,
 福原旭総降水量724mm
 死者1, 負傷者1, 家屋全壊1, 床上浸水448, 床下浸水3,611,
 一部破損6, 非住家1, 田冠水461, 道路損壊7, 橋流失2, 山崩れ38,
 鉄道2, 罹災世帯450, 罹災者1,806

昭和43年11月7日 17番札所井戸寺の火災

6時頃、徳島市国府町の四国八十八か所霊場17番札所真言宗別格本山井戸寺から出火、本堂(木造平家建瓦葺160㎡)を全焼し室内にあった県指定文化財の七仏薬師如来を焼失した。また隣接の大日堂(木造平家建瓦葺66㎡)も半焼した。井戸寺は弘仁6年(西暦815年)弘法大師が開山したものと伝えられ、また、焼失した本堂は約310年前の満治4年に建てられたものである。

昭和43年11月 少 雨

10月に続いて(10月は平年の30%)11月も全般に降水量は少なく、徳島の月降水量は10.5mmで平年の11%当り開設以来第1位の少雨の記録となった。

昭和43年12月9日 大 雨(低気圧)

東支那海を東進して、九州南部から四国沖を通過した低気圧のため、雷を伴う季節はずれの大雨となった。

日降水量 徳島69mm, 日和佐122mm, 椿泊114mm

昭和43年12月11日 地 震

20時45分に地震が発生、震源地は徳島県西部であった。震度Ⅲ 徳島, 多度津, 高知, 高松, Ⅱ 大阪, 奈良

昭和43年12月25日 鳴門海峡の流出油事故

19時33分頃、鳴門海峡で今治市のタンカー「三愛丸」(556t 乗組員13名)が四日市からハイオクタンガソリン1,000ℓを積み福岡県の西戸崎の石油基地へ向かう途中、中瀬岩礁に乗り上げ座礁した。このため、船底に穴があき約500ℓが海上に流出した。

一時は海上で引火、爆発する恐れもあり、翌日の5時30分まで航行禁止の非常体制がとられた。

昭和43年12月 高 温

12月下旬に一時的に冬型の気圧配置となったが月の前半は高く、月平均気温は10.1℃で平年より2.4℃高く、開設以来第1位の高温となった。

1969年

[昭和44年]

昭和44年1月2日～3日 大雪(西部山間部)

冬型の気圧配置が強まり、寒波の襲来で西部では大雪となり、西祖谷、一字、木屋平村などでは、交通機関は途絶し、雪中に孤立状態となった。
3日9時の積雪 一字70cm, 京上33cm, 池田11cm, 穴吹12cm

昭和44年1月31日 大雨(低気圧)

低気圧が九州南岸から四国を通過し、県南は大雨となる。
日降水量 椿泊217mm, 日和佐160mm, 穴喰145mm, 徳島53mm,
山崩れ7

昭和44年2月11日～14日 濃霧

11日夜～12日朝, 12日夜～13日朝, 13日～14日朝は、県沿岸一帯は濃霧に包まれ、海・空の交通機関のダイヤは大きく乱れた。これは低気圧が四国南岸に接近して通過し、その後移動性高気圧におおわれたため、12日朝は放射冷却して霧が発生、13日朝は日本海南部に前線が横たわり、南寄りの温暖気流が流入し海上で冷却されて発生した移流霧と陸地の放射霧が重なったため濃い霧となった。

昭和44年3月12～13日 大雪(台湾低気圧)

台湾付近に発生した低気圧が急速に発達しながら12日午前には四国沖を通ったため大雪となった。このため陸・海・空のダイヤは連休などで交通網が乱れるとともに、ビニールハウスの全・半壊により農作物にも被害がでた。
12日9時積雪 池田42cm, 芝生29cm, 穴吹15cm, 徳島4cm, 岩倉41cm

昭和44年3月20日 瑞巖寺の火災

12時55分頃、徳島市東山手町3丁目の阿波の名刹 臨濟宗妙心寺派瑞巖寺本堂西側の居宅から出火、火の回りが速く蜂須賀公ゆかりの書院など3棟 約300㎡を全焼し、本堂の一部も焼失した。瑞巖寺は仙台の松島、岐阜の小島にある寺とともに日本三瑞巖寺の一つで、焼けた書院は明治8年徳島城総取り壊しの際、城内西の丸にあたったものを移し建てたものである。

昭和44年3月21日 地震

16時40分頃、震源地を紀伊水道とする地震があり、徳島市では震度Ⅲを記録した。

昭和44年3月23日 黄砂

山陰地方では22日から23日にかけて黄砂を観測したが、徳島では23日に観測した。

昭和44年4月4日～5日 強風

低気圧が発達しながら日本海を通過し冬型気圧配置となり、4日・5日の両日は大荒れとなり、徳島の最大風速W17.0m/s(4日)、最大瞬間風速はWNW25.9m/s(5日)となった。

昭和44年4月13日～15日 濃霧

13日夜から14日朝にかけて移流霧となり、15日未明から昼前にかけて前日同様に濃霧となつて、鳴門海峡では船舶の衝突1、座礁4の海難事故が発生した。

昭和44年4月7日～13日 黄砂

7日午後から13日午前にかけて、長期にわたる黄砂を観測した。

昭和44年4月 小雨

上旬と下旬の降水量は非常に少なく、月降水量は50mmで平年の38%となり、開設以来第3位の少雨の月となった。

昭和44年5月 高温

上旬から中旬にかけて非常に高温のため月平均気温は19.3℃となり、平年より1.6℃高く開設以来第2位の高温の月となった。

昭和44年6月6日 降ひょう

低気圧が四国沖を通過した後、上空には寒気が流入し6日14時頃、勝浦町一帯に約2分間 直径1～2cmのひょうが降り、蜜柑に小被害があった。(徳島新聞)

昭和44年6月8日～10日 異常乾燥

7日から10日にかけて西日本は移動性高気圧におおわれて晴天が続き、空気は乾燥した。特に6月の徳島の最小湿度は24%となり、6月として開設以来第1位の記録となった。

昭和44年6月25日～26日 大雨(梅雨前線)

低気圧が発達しながら山陰沖を東進し、梅雨前線の活動が活発となり、県南を中心に大雨となった。日降水量 穴喰289mm, 剣山279mm, 川上251mm, 穴吹55mm, 徳島46mm
死者1, 田冠水80ha, 道路損壊1, 山崩れ5

昭和44年6月29日～7月2日 大雨(梅雨前線)

25～26日の大雨に続き再び梅雨前線の活動が活発となり大雨となった。日降水量 29日 剣山150mm, 1日 京上170mm, 剣山139mm
半壊1, 非住家被害2, 道路2, 山崩れ10, 鉄道被害1

昭和44年7月4日～5日 大雨(梅雨前線)

低気圧が山陰地方を通過し、梅雨前線の活動が活発となり大雨となった。日降水量 剣山173mm, 木頭146mm, 徳島60mm

昭和44年7月7日～8日 大雨(梅雨前線)

梅雨前線と前線上の中国地方を通過した低気圧で梅雨末期の大雨となった。日降水量 剣山136mm, 椿泊121mm, 徳島40mm

昭和44年8月4日 強風雨(台風7号)

北緯27°付近で発生し北上した台風7号は、4日19時30分頃、潮岬付近に上陸した後北東進したため、あまり強い風や大雨がなく本県への影響は少なかった。徳島最大風速S12.7m/s, 総降水量(3日9時から5日9時まで) 福原旭118mm, 剣山115mm, 徳島28mm
家屋倒壊1, 山崩れ1, 道路損壊

昭和44年8月20日 降ひょう

日本海にあった寒冷前線の南下で、15時30分頃 貞光町一帯に雷雨が発生、約15分間にわたり直径1.5cmのひょうが降り、葉タバコに被害があった。(徳島新聞)

昭和44年8月22日～23日 台風9号

グアム島の西方海上で台風となった9号は、沖縄の西方を通り22日10時前に九州南部に上陸し、四国南部をかすめて本州を縦断して殆んど全国に影響を及ぼしたが、徳島では被害は軽微であった。最大風速SE17.0m/s, 総降水量 徳島89.5mm, 木頭300mm, 福原旭286mm
非住家倒壊1, 床下浸水25, 山崩れ4

昭和44年9月7日 雷雨

寒冷前線の通過で県下は激しい雷雨に見舞われ、徳島市、阿南市、那賀川町、羽ノ浦町などで落雷のため停電があった。また、徳島駅では落雷による電気設備の故障により、ダイヤが混乱した。日降水量 小松島151mm, 富岡103mm, 徳島市45mm

昭和44年9月 少雨

秋雨前線の活動も弱く台風の影響もなかったため徳島の月降水量は75mmで平年の29%に当り、少雨の順位は開設以来第5位の記録となった。

昭和44年11月15日 大雨(二つ玉低気圧)

二つ玉低気圧の通過で県南では、この季節には珍しい大雨となった。日降水量 椿泊194mm, 伊島146mm, 徳島35mm

昭和44年11月30日 大雨(低気圧)

低気圧が山陰沖を通過し、県南の椿泊では29日 135mm, 30日 27mm, 合計162mmの大雨があった。

昭和44年12月7日 大雨(低気圧)

二つ玉低気圧が東進し県下は大雨となり、山崩れ2ヶ所があった。総降水量川上174mm, 小松島141mm, 徳島66mm

昭和44年12月8日～45年1月29日 無降水

冬型気圧配置と移動性高気圧におおわれ、穏やかな晴天が続き、53日間無降水が続いた。

1970年

〔昭和45年〕

昭和45年1月5日 寒 波

大陸高気圧は4日 1,070 mb に発達し、顕著な冬型気圧配置となり、寒気が押し寄せ降雪が激しくなった。15日9時の積雪、芝生18cm、一字17cm、穴吹15cm、池田14cm、徳島1cm

昭和45年1月13日～14日 火 災

冬型気圧配置で季節風が強く、好天続きのため火災が続発した。(13日、県下の火災11件)

昭和45年1月30日～31日 強風雨(低気圧)

東支那海南部に発生した低気圧が発達して四国沖を通過したため全国的に強風雨となった。徳島最大風速WNW15.0m/s, 日降水量 椿泊119mm, 日和佐88mm, 徳島68mm, 小松島95mm

昭和45年2月 小 雨

月初めは冬型の気圧配置となったが長続きせず、中旬まで移動性高気圧におおわれる日が多く、下旬は北高型で雲が多く 月降水量は9.0mmで平年の15%に当たり、開設以来第2位の少雨の月となった。

昭和45年3月8日 上板町の山火事

11時20分頃、板野郡上板町引野の山林から出火、火は約12時間に渡って延焼を続け約100haを焼失した。この火災で一時10数戸の民家が類焼の危機に見舞われたが、被害はなかった。なお、この山火事は延焼面積において、県下で戦後最大の規模となった。

昭和45年3月30日 た つ ま き

正午頃、鴨島町上下水と広畑地区一帯で局地的な「たつまき」が起り、ビニールハウス10棟が倒壊または半壊した。地元の話ではゴォーと云う音とともに幅50cmのたつまきが西から東へ約800mにわたって吹き抜けたとのことであった。(徳島新聞)

昭和45年3月 低 温

下旬中頃まで冬型の気圧配置がよく現われ、2日、5日、12日、17日、20日頃を中

心に寒波に見舞われたため月平均気温は6.1°Cで平年より2.0°C低く、開設以来第3位の低温の月となった。

(徳島県農林水産部調べ)

種 別	作 付 面 積	被 害 面 積	被 害 推 定 量	被 害 推 定 金 額
麦 類	9,914 ha	9,914 ha (収穫皆無4,910)	15,032 t	874,259 千円
そ 菜	2,912	1,566	23,780	730,720
種 用 大 根	76	76	88	20,240
果 樹	1,395	770	720	110,350
計	14,297	12,326	39,620	1,735,569

昭和45年4月8日 大阪市天六のガス爆発事故

17時10分頃、大阪市淀川区の京阪神急行天六駅近くの地下鉄工事現場で都市ガスが漏れ、連続的な爆発を起こし、周辺2,000㎡にわたって炎上した。ラッシュアワーで通行人も多く、爆風と炎で多数の死傷者が出、都市の事故では例を見ない大惨事となった。死者29, 重傷者134, 軽傷者165, 全焼家屋22, その他損壊110

昭和45年6月 寡 照

10日から27日までの長雨で中旬から下旬にかけては、日照時間は少なく月・日照時間は87.3時間で平年の50%に当たり寡照第2位の記録となった。また、不照日数が14日もあった。

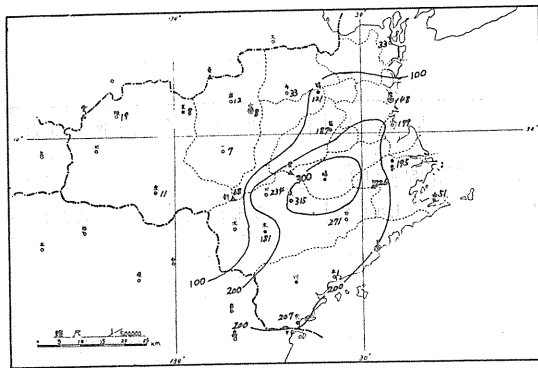
昭和45年7月5日 強風雨(台風2号)

宮古島付近を通り北東に軽向した台風2号は、5日18時30分頃紀伊半島に上陸し北西に向きを変え、大阪湾を経て日本海に入り西進する異常な経路をとったが、前線活動も弱く被害は軽微であった。徳島最大風速NNE15.0m/s, 総降水量は東部山間部で多く、鬼籠野250mm, 剣山244mm, 日降水量 鬼籠野191mm, 剣山165mm, 穴吹111mm, 徳島49mm

床下浸水15, 田冠水2ha, 堤防決壊1, 道路損壊4, 山崩れ10

(県警調べ)

昭和45年7月8日 大雨(梅雨前線)



雨量分布図

早朝、台風2号くずれの低気圧が九州西方海上に接近し、四国南岸沿いに停滞していた梅雨前線を刺激して県南を中心に日和佐で7時に1時間90mm、徳島で8時に1時間53mm、富岡で51mmと短時間に強い雨を降らせたため多大の被害が出た。日降水量 福原旭193mm、大竜寺140mm、小松島120mm、徳島86mm

城南台地の擁壁崩壊

死者1, 家屋の全壊1, 一部破損1, 床上浸水252, 床下浸水3,454, 田冠水867ha, 畑冠水237ha, 山崩れ7, 道路損壊2, 堤防欠壊1, 鉄道被害3

昭和45年4月~7月中旬 長雨

3月の低温, 4月の多雨, 6月の寡照, 7月のつゆ明けの遅れなど, 昭和38年4月~6月の長雨以来の異常気象により広島, 岡山, 香川, 徳島県を中心に西日本一帯にわたり農作物等に大きな被害が生じた。徳島県でも野菜・果樹等の農作物に大きな打撃を受けた。

被害

(徳島統計調査事務所調べ)

作物名	被害面積	被害量	被害金額
水稲	1,420 ha	373 t	5,0700 千円
麦類	9,680	18,400	1,082,700
野菜	3,000	32,200	1,628,400
果樹	1,000	984	94,300
その他	1,290	33,680	65,400
計	16,400		2,921,500

昭和45年7月22日 オゾンの大量発生

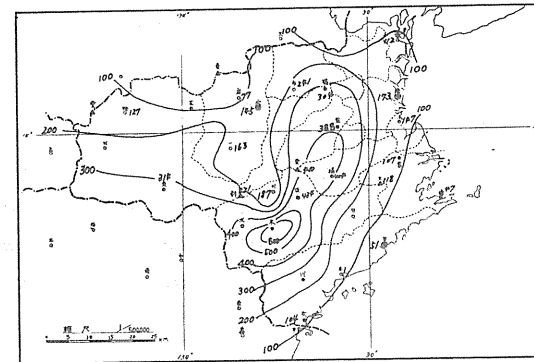
22日午後、阿南市と海部郡下灘地方で中学生, 一般住民など1,416人が喉・胸の痛みを訴えたが, 県公衆衛生課の調査によりオゾンの大量発生が原因であることが判明した。

昭和45年7月31日~8月1日 大雨(熱低)

奄美大島近海から九州西方海上を北上した台風6号くずれの熱帯性低気圧の影響で県南は大雨となり, 総降水量で 穴喰288mm, 日和佐262mm, 徳島28mmを観測した。(日降水量は穴喰201mm)を観測した。

床下浸水20, 田冠水174ha, 山崩れ6

昭和45年8月14日 暴風雨(台風9号)



雨量分布図

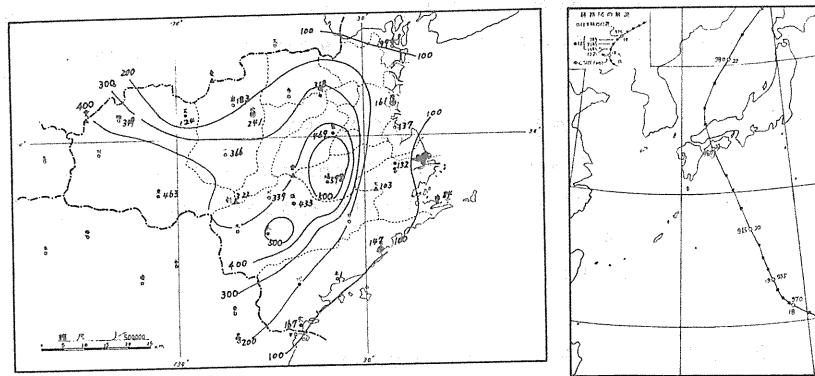
沖縄本島, 奄美諸島を暴風雨圏に巻き込み北上して, 14日23時頃, 長崎市に上陸(945mb), 山陰を斜めに横切り15日朝 日本海に入った台風9号は典型的な夏型台風であった。このため比較的雨量の少ない阿讃山脈沿いに大雨が降り, 板野, 鳴門, 徳島市を中心に被害が出た。

最大風速SSE20.0m/s, 最多雨域総降水量 木頭672mm, 江田山578mm, 徳島

173mm (日降水量は木頭576mm, 江田山515mm, 徳島133mm)

負傷者6, 家屋の全壊1, 半壊1, 一部破損5, 非住家被害11, 床上浸水105, 床下浸水1,126, 田冠水236ha, 畑冠水6ha, 道路損壊3, 橋梁1, 堤防6, 山崩れ34, 鉄道被害3, 罹災世帯107, 罹災者333

昭和45年8月21日 暴風雨(台風10号)



雨量分布図

経路図

北々西進して高知県西部の佐賀町付近に8時すぎ上陸した台風10号(9.62mb)は四国西部を縦断し日本海に入り、四国・中国・九州・近畿の一部を暴風雨圏に巻き込んだ。特に高知では高潮で未曾有の災害が発生した。台風の転向点はN36°付近の高緯度のため徳島県は長時間暴風雨にさらされ、台風9号に続く来襲で河川は増水し、吉野川の氾濫で穴吹町舞中島に大きな被害が発生した。最多雨域総降水量 日早700mm, 福原旭598mm, 木頭508mm, 徳島161mm (日雨量 福原旭384mm, 京上303mm, 徳島126mm) 最大風速SSE24.5m/s

死者6, 負傷者6, 行方不明2, 家屋全壊19, 半壊45, 流失2, 床上浸水406, 床下浸水4,767, 一部破損36, 非住家72, 田流失・埋没14ha, 田冠水1,739ha, 畑流失・埋没15ha, 畑冠水372ha, 道路損壊26, 橋梁4, 堤防7, 山崩れ190, 鉄道不通3, 通信159回線, 船舶1, 罹災世帯475, 罹災者1,451

昭和45年9月 高温

太平洋高気圧の勢力が強く、残暑が厳しく月末まで平年より高め経過した。月平均気温は25.1°Cで平年より1.9°C高く、開設以来第2位の記録となった。

昭和45年11月18日~20日 大雨(低気圧)

四国沖に発生した土佐沖低気圧は、殆んど停滞して県下に大雨を降らせた。

総降水量 徳島109mm(85mm), 小松島122mm(96mm), 椿泊162mm(112mm) ()内は日降水量
山崩れ1, 非住家1

昭和45年12月13日 強風雨(低気圧)

低気圧が発達しながら日本海を北東に進み、風雨が強まった。

徳島最大風速W18.3m/s, 日降水量 穴喰122mm, 川上113mm, 徳島25mm

1971年

[昭和46年]

昭和46年1月4日～5日 強 風

低気圧が日本海を通過し、5日は北海道沖で970mbに発達した。このため、4日から5日にかけて顕著な冬型となり、冷え込むとともに徳島で最大風速WNW16.0m/sの強風が吹いた。積雪は徳島3cm、鬼籠野5cm

昭和46年2月上旬 寒 波

1月末から2月上旬にかけて冬型気圧配置が続き、寒波が来襲、西部山間部では連日雪となり、交通機関は麻痺状態となった。池田町では1日から3日までに約20cmの積雪があった。

昭和46年3月2日～3日 強 風 , 大 雨 (低 気 圧)

2日夜から3日にかけて二つ玉低気圧が通過し、強風となり県南では大雨となった。この強風により鳴門海峡では養殖ワカメが海岸へ打ち上げられるなど被害がでた。

昭和46年3月 少 雨 , 多 照

この月は例年に比べ好天の日が多く少雨、多照の月となった。月降水量は33.5mmで平年の36%に当り、月・日照時間は219.2時間で平年の12%に当り、順位は何れも開設以来第4位となった。

昭和46年4月28日～29日 強 風 雨 (低 気 圧)

28日から29日にかけて二つ玉低気圧が通過し、最大風速SSE13.8m/sを記録し県南では大雨となった。日降水量 穴喰172mm, 川上138mm, 徳島48mm

昭和46年1月～4月 空 気 乾 燥

1月から4月にいたる期間、湿度は全般に低く、特に1月と3月には火災の続発が目立った。月平均湿度は平年より、1月60%で7%, 2月61%で6%, 3月57%で12%, 4月66%で6%低かった。

昭和46年5月14日 降 ひ よ う , 落 雷

低気圧が日本海を通過し、この中心から南西にのびる寒冷前線が13日午後から14日にかけて西日本を通過した。また上空には寒気が流入し、大気成層は不安定となり西日本各地で発雷した。県下では、14日の11時45分頃から約30分間、阿南市南部から海部

郡北部にかけ直径2.5cmのひょうが降り、負傷者がたほか、農作物に被害があった。また落雷による火災が4件と停電事故が発生した。

葉タバコ等の被害面積13.5ha, 被害額715万円(県農林水産部調)

昭和46年6月3日～7月1日 長 雨

四国地方は6月3日に梅雨に入り、梅雨前線が本州南岸沿いに停滞し、この前線を低気圧が次々に発生、通過したため天気はぐずついた。この期間の雨量は、徳島市内で188mmで平年より少なめであったが、梅雨入りが早く、麦の刈取期に当たった阿波、麻植、名西郡などでは、穂発芽や穀粒の変色腐敗等で品質が低下し焼却処分をしたところもあった。

被 害 表

(徳島統計調査事務所調べ)

種 別	被 害 面 積	被 害 量	被 害 金 額
小 麦	1,140 ha	740 t	45,214千円
ビ ー ル 麦	820	497	30,963
裸 麦	5,210	3,470	220,692
計	7,170	4,707	296,869

昭和46年6月8日 上 那 賀 町 の 火 災

2時頃、那賀郡上那賀町の宮浜中学校北東校舎から出火、木造2階建の同校舎、棟続きの木造2階建の本館、別棟の鉄骨平家建の工作室及び木造平家建の体育倉庫の計4棟 延面積1,252㎡を全焼した。さらに隣接の木造2階建の上那賀町役場の庁舎(延面積437㎡)を全焼して4時過ぎ鎮火した。なお、この火災で役場の重要書類は殆んど焼失し、中学校では講堂兼公民館を仮の教室として授業を実施した。被害額 約5千万円

(上那賀町役場調べ)

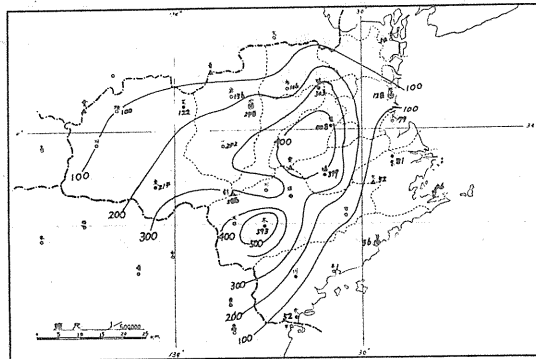
昭和46年7月18日 降 ひ よ う

日本付近は気圧の谷となり、上層ではかなり強い寒気が流入し気層が不安定となったため、15時30分頃から約30分にわたって阿南市伊島と椿町蒲生田地区でひょうが降り(直径1~2cm) 早期米に被害があった。

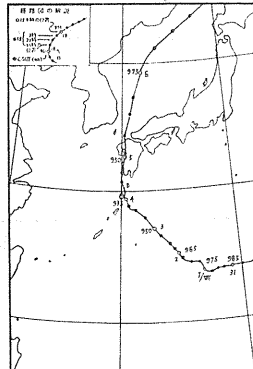
昭和46年7月24日～25日 大雨(梅雨前線)

梅雨前線の活動が活発となり、県南では大雨となった。
日降水量は川上232mm、穴喰141mmで、総降水量は300mmを越えた。

昭和46年8月4日～5日 暴風雨(台風19号)



雨量分布図

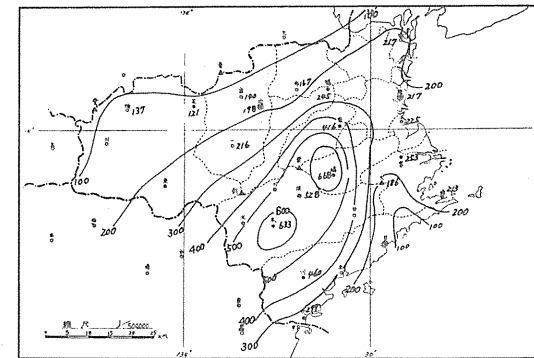


経路図

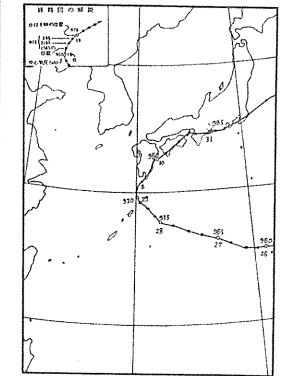
硫黄島の南西海上から北西進し九州西岸をかすめ、5日9時50分頃、長崎県島原半島に上陸(950mb)した台風19号は、5日夜日本海に入り速度を早めながら7日12時には宗谷海峡に達し、温帯低気圧となった。この台風は通過するまでは移動速度が遅く、また大型台風であったため、徳島から300kmを越える遠距離を通ったにもかかわらず、長時間にわたって断続的に強い風雨をもたらした。徳島最大風速SSE21.7m/s、総雨量128.5mm、最多雨域 木頭59.3mm、江田山44.0mm

床下浸水4、非住家1、田冠水6.3ha、畑冠水2ha、道路損壊7、山崩れ14、橋梁1、鉄道1、通信被害60回線

昭和46年8月30日 暴風雨(台風23号)



雨量分布図



経路図

南鳥島の南海上からゆっくり西進して鹿児島島の南方海上で軽向した台風23号は、29日23時30分佐多岬に上陸し、日向灘を経て30日20時まえ、高知県南国市に再上陸し徳島県中部(975mb)を通り大阪湾、紀伊半島、東海道を東へ進んだ。この台風は8月台風には珍しく大型で強く異常なコースをとったため、九州から関東にわたる広範囲に大きな被害をもたらした。県下では那賀川中流で30日午後60mm以上の強雨が3時間程続き、ダム の放流と相まって局地的に大きな水害をもたらした。このため驚敷町では災害救助法が発令された。徳島の最大風速SE21.3m/s、総雨量216mm、最多雨域 福原旭66.8mm、木頭63.3mm

死者2、負傷者6、床上浸水230、床下浸水2,258、非住家3、田冠水81.2ha、畑冠水35.0ha、道路損壊11、橋梁2、堤防2、山崩れ45、通信519回線、罹災世帯230、罹災者852

昭和46年9月5日～6日 大雨(前線)

日本海から南下した前線が本州を横断して停滞し、北上してきた台風25号の影響で前線活動が活発となり雷を伴う大雨が県南部を中心に降った。

日降水量 木頭194mm(227mm)、坂州156mm(204mm)、徳島16mm(27mm) ()内は総降水量

昭和46年9月3日～中旬 異常潮位

太平洋岸を中心に3日夕刻から記録された異常潮位は、九州・瀬戸内海にも及び、6日頃峠に次第に低くなつたが月末まで続いた。小松島港における潮位のピーク時は、平常より2.5cm前後高く、5日から6日にかけては大潮と重なって床下浸水などの被害が発生した。原因としては、黒潮の日本沿岸接近、大潮の時期、前線、台風等による気象潮とその多量の降水等の悪条件が重なつたという見方が強いが、今後の調査に待つところが多い。

被害 (県警調べ)

月 日	区 分	鳴門市	徳島市	小松島市	阿南市	計
9月5日	床下浸水	5	0	0	18	23戸
	道路冠水	2	1	1	1	5カ所
9月6日	床下浸水	0	2	0	25	27戸
	道路冠水	0	1	1	2	4カ所

昭和46年9月17日～18日 大雨

16日から18日にかけて、本州南岸に秋雨前線が停滞し、台風27号が南太平洋上であつて西進した。この影響で前線が活発化し、四国沖を小低気圧が通過した。最多雨域の川上では日降水量24.9mm、総降水量26.1mmを記録した。穴喰22.3mm(23.2mm)、徳島4.0mm(4.8mm) ()内は総降水量
床下浸水5、田冠水130ha、山崩れ3、

昭和46年11月 少雨

高気圧におおわれることが多く、降水量は20.0mmで平年の22%に当り、開設以来第5位の少雨の月となつた。

昭和46年12月上旬～中旬 異常乾燥

一時的に冬型の気圧配置となつたが長続きせず、高気圧におおわれる日が多く、空気は乾燥し火災が頻発した。上旬の湿度は5.7%で平年より1.3%低く、中旬は6.2%で7%低かつた。

1972年

[昭和47年]

昭和47年1月1日 大雨(低気圧)

台湾低気圧が発達して四国沖を通過(984mb)したため大雨となり、小松島市和田島、那賀川町今津、鳴門市里浦の各海岸では収穫期をひかえた養殖ワカメやノリなどが荒波により大きな被害を受けた。徳島最大風速NNE11.7 m/s 、日降水量 徳島45mm(74mm)、鬼籠野67mm(132mm)、一字52mm(95mm) ()内は総降水量

昭和47年1月～2月中旬 高温

冬型の気圧配置は弱く長続きせず、寒波の吹き出しもなかったため非常に高温となり、1月の平均気温は8.0°Cで平年より2.9°C高く、開設以来第1位の高温の月となった。また、2月上旬は平均6.7°Cで平年より2.0°C高く、中旬は7.8°Cで平年より2.8°C高かった。

昭和47年1月～2月 多雨

高温多雨で1月の月降水量は119.5mmで平年の2.6倍に当り、開設以来第3位、2月の月降水量は205.0mmで平年の3.8倍に当り第1位の多雨の月となった。

昭和47年2月10日 大雪(低気圧)

低気圧が発達しながら四国沖を通過したため、9日夜から降り始めた雪は、10日朝まで断続的に降り続き池田39cm、一字35cm、岩倉33cm、穴吹10cm、徳島1cmの積雪となった。このため山間部ではバスがストップするとともに国鉄のダイヤが乱れ、臨時休校や停電事故が相次いだ。また、農作物や果樹にハウスの倒壊や枝折れによる被害が出た。

昭和47年2月13日 強風雨(二つ玉低気圧)

二つ玉低気圧が発達して通過したため風雨が強まり、徳島で最大風速SSE15.7 m/s 、日降水量52mmを観測した。
山崩れ4

昭和47年2月26日 大雨・強風(二つ玉低気圧)

二つ玉低気圧が発達しながら通過したため風雨が強まり、徳島の最大風速はSE12.3 m/s 、日降水量77mm、川上では日降水量187mmを記録した。このため鳴門海峡の養殖ワカメ、海南町浅川湾の養殖ヒロメ(ワカメの一種)などに大きな打撃を被った。

昭和47年3月20日 高温(日本海低気圧)

低気圧が日本海を発達して通過したため南から暖気が流れ込み、異常高温となり徳島の最高気温は22.4°Cで平年より8.8°C高く、日平均気温は17.9°Cで平年より9.2°Cも高くなった。この日は、また強風が吹き、春一番となった。徳島最大風速WNW11.3 m/s 、最多雨域 穴喰日降水量49mm、総降水量83mm

昭和47年3月31日 強風(低気圧)

日本海を通過した低気圧が発達し春三番となり、日本近海では海難事故が続発した。徳島最大風速WNW17.7 m/s

昭和47年4月1日～2日 おそ雪

31日に低気圧が日本海を通過した後、冬型の気圧配置となり徳島市内でも雪がちらついた。これは終雪の遅い記録としては開設以来第3位となった。 京上12cm

昭和47年4月16日～17日 黄砂

16日から17日にかけて、徳島県地方に黄砂が観測された。

昭和47年5月4日 大雨(低気圧)

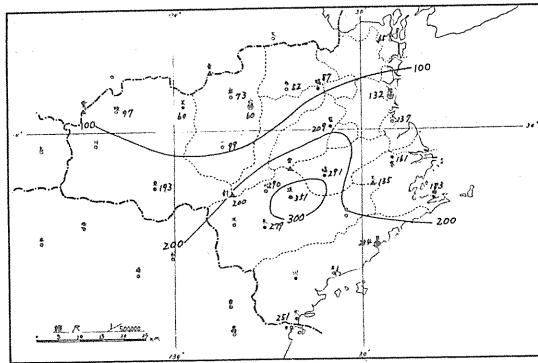
低気圧が発達しながら山陰沖を通過し、県下は大雨となった。最大風速12.7 m/s
日降水量 穴喰196mm、川上191mm、日和佐86mm、徳島62mm

昭和47年5月13日 千日デパートの火災

22時44分頃、大阪市南区灘波新地の千日デパート(地上7階、地下1階)の3階から出火、エスカレーターのシャフトを経て1～4階まで一瞬のうちに燃え拡がり、7階のアルサロの客と従業員が店内に閉じ込められた。飛び降りた人、有毒ガス及び一酸化炭素中毒により窒息した人など、わが国ビル火災史上最大の犠牲者を出す大惨事となった。このように多数の犠牲者が出た原因として、デパート側の通報連絡がなかったこと、避難誘導が不適であった他、大量の可燃物があったこと及びそれによる煙(有毒ガス)の噴出が激しかったこと等が上げられ、以後のデパートの保安管理に大きな課題を残した。

死者118、負傷者81(内消防職員27)

昭和47年6月7日～8日 大雨，強風（低気圧）

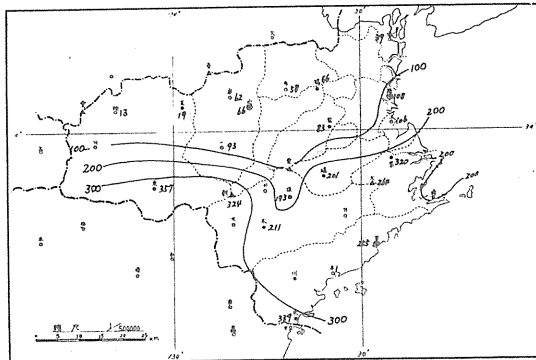


雨量分布図

台風ぐずれの低気圧が九州西方から日本海を通過し、梅雨前線を刺激したため大雨となった。最大風速19.3m/s、日降水量 坂州351mm、福原旭291mm、徳島132mm（8日5時～6時の1時間降水量60.5mm 開設以来第1位の記録）

床上浸水1,276，一部破損1，田冠水50ha，畑冠水10ha，道路損壊4，山崩れ8

昭和47年7月4日～6日 大雨（前線，湿舌）

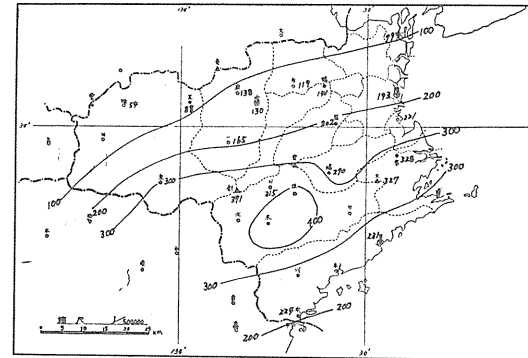


雨量分布図

3日朝，黄河下流に発生した低気圧は黄海で992mbに発達し、ゆっくり東に進み、5日朝には日本海に入った。この低気圧に向って東支那海から湿った暖気が流入し、西日本では雷を伴った局地的大雨が群発し、高知県繁藤の大山崩れ、宮城県蝦野の山崩れ、天草竜ヶ溪の山崩れ等で生き埋め事故が続発した。県内でも阿南市を中心に家屋の浸水、山崩れなど被害が出た。

多雨域 山口，総降水量556mm，富岡320mm（159mm），京上357mm（286mm），徳島108mm（55mm）（ ）内は日降水量

昭和47年7月10日～13日 大雨（梅雨前線）



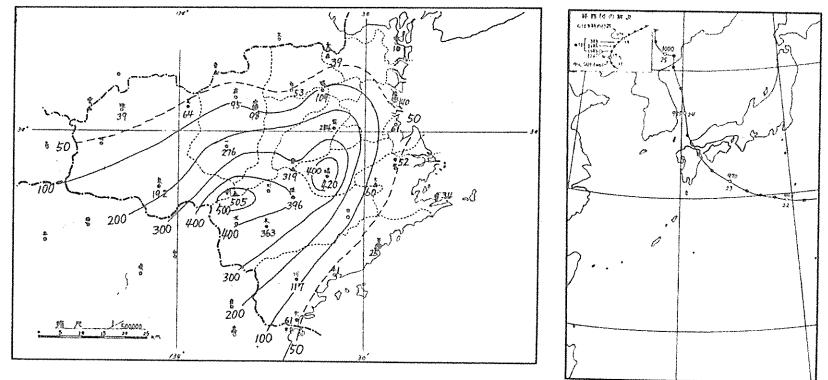
雨量分布図

低気圧は11日から13日にかけて東支那海をゆっくり東進し、九州西岸に接近し、西日本の上空には湿った南西気流の流入が続き前線の活動は活発となり、九州北部、山陰、浜田、呉、三次と豪雨が襲い、穴道湖氾濫、東でも富士の大沢崩れ、奥三河等災害が続いてゲリラ梅雨とも言われた。最多雨域は剣山南東斜面の日早で総降水量617mm（245mm），木頭459mm（205mm），北川533mm（290mm），徳島193mm（152mm），

富岡328mm（226mm）（ ）内は日降水量

家屋全壊1，半壊1，床上浸水10，床下浸水489，非住家2，田冠水175ha，畑冠水81ha，道路損壊5，山崩れ2，堤防2，罹災世帯11，罹災者38

昭和47年7月23日～24日 大雨，強風（台風9号）



雨量分布図

経路図

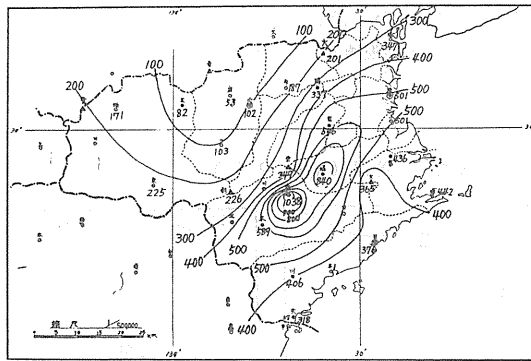
ウェーク島の南海上から北西進した台風は、四国西部を暴風圏にまき込み、23日20時頃、大分県南東岸に上陸し日本海西部を北上した。この台風は四国はるか南海上を通過したため被害は軽微であったが、各地に大雨をもたらした。最多雨域 632mm(日早)
 総降水量 剣山505mm(274mm), 木頭363mm(206mm), 徳島40mm(30mm),
 最大風速SE16.0 m/s

家屋一部破損1, 道路損壊2, 山崩れ5

昭和47年7月下旬~8月 異常潮位

台風7号, 9号の影響と大潮が重なって西日本一帯の沿岸では, 7月下旬から8月中旬まで異常潮位が続き, その後平常に戻り始めたが25日頃から再び潮位は高まり, 月末まで続いた。小松島港での潮位は2月23日頃から10~20cm高くなり, 27日には最大偏差28cmを記録した。27日から29日と8月10日, 26日は大潮と重なったため, 小松島市内の一部で道路が冠水したが, 被害は殆んどなかった。

昭和47年9月6日~9日 大雨(弱い熱低と秋雨前線)



雨量分布図

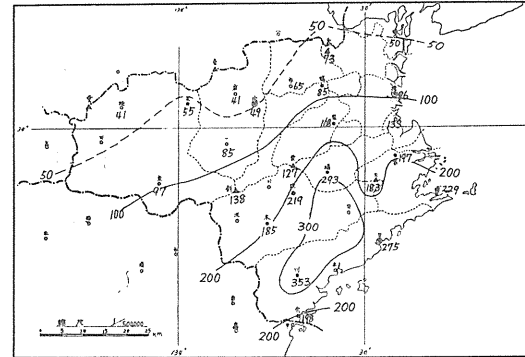
マーカス島付近から西進した熱帯低気圧は九州の南海上で北に転向し, 九州を横断し分裂して四国を東進したため, 秋雨前線を刺激して大雨を降らせた。このため徳島, 小松島市で床上・床下浸水の被害が目立った。総降水量は坂州1,038mm(582mm), 小松島501mm(366mm), 徳島501mm(297mm)

()内は日降水量

死者1, 家屋全壊2,

半壊2, 床上浸水894, 床下浸水9,747, 一部破損14, 非住家6,
 田冠水488ha, 畑冠水276ha, 田畑流失54ha, 道路損壊2,
 山崩れ46, 堤防2, 鉄道不通2, 通信9, 罹災世帯895, 罹災者2,892

昭和47年9月13日~15日 大雨(低気圧と前線)



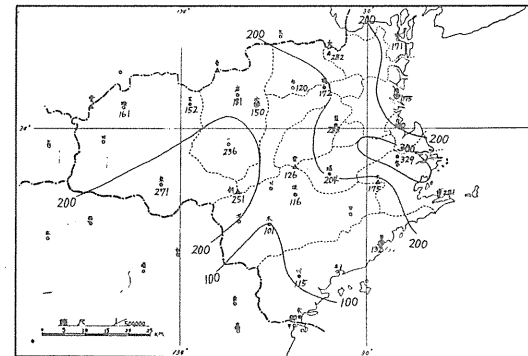
雨量分布図

13日朝, 上海付近に現われた低気圧は発達しながら東北東に進み朝鮮海峡を通過したが, この中心から南東にのびる温暖前線の活動が活発となり大雨となった。このため日和佐では14日21時に1時間141mmの豪雨があった。総降水量は川上353mm(294mm), 穴喰298mm(270mm), 日和佐376mm(272mm), 徳島99mm(96mm)

()内は日降水量

床上浸水1, 床下浸水275, 非住家1, 田冠水237ha, 橋梁流失11,
 山崩れ6, 罹災世帯1, 罹災者5

昭和47年9月16日 大雨, 強風(台風20号)



雨量分布図

南大東島付近から北北東進し, 16日18時半頃 紀伊半島に上陸し富山港に抜けた台風20号は, 四国南部・近畿・中部地方及び東北・北海道を暴風雨圏に巻き込んだ。徳島最大風速WNW17.7 m/s 最大瞬間風速WNW31.6 m/s 総降水量 富岡329mm(270mm), 大山寺282mm(256mm), 徳島175mm(132mm)

()内は日降水量

床上浸水290, 床下浸水2,002, 家屋一部破損5, 非住家12, 田冠水460ha, 畑冠水200ha
 畑流失埋没0.5ha, 道路損壊9, 山崩れ58, 橋梁1, 堤防4, 鉄道不通3,

罹災世帯290, 罹災者990

昭和47年9月18日 降ひょう

15時15分頃から約2分間、日和佐町・由岐町・牟岐町一帯で最大直径1cmのひょうが降ったが、被害はほとんどなかった。

昭和47年9月 多雨

熱帯低気圧と秋雨前線、台風20号など大雨が続いたため月降水量は780mmで平年の2.7倍となり、開設以来第4位の記録となった。

昭和47年10月29日～30日 高波(台風26号)

台風26号は29日 硫黄島の東方海上から北東に向きを変えたため、県沿岸では29日から30日朝にかけ、大波が打ち寄せ、那賀川町の今津海岸沖で養殖しているノリやワカメの種苗に大きな被害を受けた。

昭和47年11月6日 北陸トンネル列車火災

1時13分頃、国鉄北陸本線の北陸トンネル(延長1,3720m)敦賀側から4kmのところで、急行列車の食堂車から出火、煙がトンネル内に充満し、煙にまかれた乗客など多くの人命が一酸化炭素中毒で奪われた。1.3kmもある長大トンネル内で起きた真夜中の列車火災は国鉄行政に大きな波紋を投げかけた。

死者29, 重傷者107, 軽傷者612 (福井県警調べ)

昭和47年12月1日 大雪

冬型の気圧配置となり勝浦郡を中心に大雪となり、福原旭では約40cmの積雪があった。このため蜜柑の枝折れや凍害などの被害がでた。京上5cm, 鬼籠野4cm, 穴吹2cm 徳島最大風速W15.0m/s

昭和47年12月23日～24日 大雨(低気圧)

台湾低気圧が発達して四国沖を通過したため大雨となり、日降水量は穴喰166mm, 川上142mm, 富岡122mm, 徳島96mmと、この季節には珍しい大雨となった。徳島の最大風速WNW11.8m/s

昭和47年11月下旬～12月下旬 少雨

11月下旬は冬型で、12月上旬～中旬は高気圧におおわれたため好天が続き、11月17日から12月22日までの徳島の降水量は1mmであった。

昭和47年 多雨

降水量は、1.2.7.9.12月は特に多く、年降水量は2,441.5mmで平年の1.4倍に当り、開設以来第4位の多雨の年となった。

1973年

[昭和48年]

昭和48年1月24日 強風雨, 異常高温(日本海低気圧)

低気圧が発達して日本海を通過したため風雨は強まり, この低気圧に向かって暖気が流れ込んだため気温は上昇した。日降水量 穴喰117mm, 川上117mm, 徳島39mm, 徳島の最大風速SSE13.7m/s, 徳島の平均気温は14.0°Cで平年より9°C高く, 最高気温は16.8°Cで7.4°C高くなった。また, この日は強風のため鳴門海峡に面した大毛海岸やその沖合の養殖ワカメ・ノリが荒波にもまれ被害を蒙った。

昭和48年1月 多 雨

冬型気圧配置は一時的で弱く, 次々と顕著な低気圧が通過したため月降水量は118mmとなり, 平年の2.5倍に当り開設以来第4位の多雨の月となった。

昭和48年1月~2月 高 温

冬型気圧配置は一時的で弱く, 2月に寒波の吹き出しは2回あったが弱く, 月平均気温は1月が6.9°Cで平年より1.8°C高く, 開設以来の順位は第5位, 2月が7.3°Cで平年より1.9°C高く, 第4位の高温の月となった。

昭和48年2月12日~16日 異 常 乾 燥

12日頃から16日にかけては好天続きで, 空気は乾燥し火災が続発した。最小湿度は12日32%, 13日44%, 14日37%, 15日42%, 16日27%であった。

昭和48年3月22日~28日 異 常 乾 燥

徳島の最小湿度は22日37%, 23日50%, 24日12%, 25日37%, 26日36%, 27日37%, 28日47%で各地で火災が続発した。

昭和48年3月 少 雨

月初めに冬型となったが弱く, その後は周期的に変ったが, 天気のおくずれは弱く月降水量は僅か4.0mmで平年の4%に当り, 開設以来第1位の少雨の月となった。

昭和48年4月16日~17日 大 雨, 強 風(低気圧)

日本海を低気圧が発達しながら通過したため, 県南を中心に大雨となり, 強風が吹いた。

昭和48年4月 高 温

3月28日から異常に高く経過し4月4日~6日に低目になったが, 全般に高く月平均気温は15.9°Cで平年より2.3°C高く, 開設以来第3位の高温の月となった。

昭和48年5月2日 大 雨(二つ玉低気圧)

二つ玉低気圧が発達しながら通過したため県南では大雨となり, 穴喰では4時から9時まで161mm, 総降水量192mmを観測した。徳島総降水量39mm, 最大風速SSE13.2m/s

昭和48年5月8日 大 雨(低気圧)

低気圧が四国沖を經過し県南では大雨となった。徳島の最大風速SSE14.0m/s, 総降水量は伊島204mm(192mm), 日和佐185mm(159mm), 徳島36mm(24mm)
()内は日降水量

昭和48年5月19日~20日 黄 砂

19日から20日にかけて県内で黄砂を観測した。

昭和48年6月27日 中 国 水 爆 実 験

27日正午, 中国西部で水爆実験が行われた。このため, 西日本では28日から29日にかけて人体等への被害が心配されたが, 放射能による異常はなかった。

昭和48年7月27日~31日 異 常 潮 位

台風6号が異常なコースをとり西日本の太平洋上を旋回, 各地で異常潮位となり, 小松島港では27日頃から20~30cm高く, 月末には大潮と重なり最大偏差32cm(30日18時)を記録した。小松島市で床下浸水9。

昭和48年7月26日 大 雨(台風6号)

硫黄島の南西海上で発生した台風6号は北方して, 21日朝, 潮岬の南方約150kmに達し旋回して四国沖を熱帯低気圧に衰えて西進した。その後, 九州西海上で再び台風となり, 九州を横断して熱帯に衰弱し四国沖を通過, 26日には県南に大雨を降らせたが被害はなく, 千天に恵みの雨となった。

日降水量 穴喰110mm

昭和48年8月7日 降ひょう

太平洋高気圧におおわれ夏型の気圧配置となったが、午後から県内の所々で発雷があり、13時45分頃から約2分間神山町焼山寺付近で直径2cm位のひょうが降った。被害なし。

昭和48年6月上旬～8月中旬 少雨(干ばつ)

梅雨は6月5日に入り、空梅雨傾向に経過し、7月11日に不明瞭な梅雨明けとなった。7月下旬に入り台風6号が西日本に接近したため県南では恵みの雨となったが大きくなりずれはなく、その後は太平洋高気圧の圏内で暑い晴天が続いたため、県下全域にわたって干ばつとなり、農作物等への被害が心配されたが、8月14日～16日の台風10号の影響による大雨で概ね解消された。徳島市における7月の月降水量は33.0mmで平年の17%に当り、開設以来第3位の月となった。また、6・7月の月降水量は合計103.5mm、6月1日から8月13日までの総降水量は合計122mmで何れも開設以来の少雨となった。干害による被害は主として農作物、果樹等に7月中頃から始めた。

8月13日現在

(県農林水産部調べ)

種別	作付面積	被害面積	被害量	被害金額
水稲	22,000 ha	156 ha	194.6 t	28,407千円
野菜	1,688	82.3		65,470
果樹	6,044	1,470.5		96,103
甘藷	1,430	300	957	72,000
飼料作物	3,332	48.5	1,124	33,720
桑	2,008	1,446		75,300
合計	36,502	3,503.3		371,000

昭和48年8月14日～16日 大雨(台風10号)

ゆっくり北上を続けた台風10号は15日9時には奄美大島を通過し、中心気圧は975mbと衰えず東支那海中部を北上して17日夜 朝鮮中部に上陸、18日3時には朝鮮の北東岸に達し温帯低気圧となった。この台風は四国地方を大きく迂回したにもかかわらず、南からの暖湿気流の流入で14日夜から長時間にわたって大雨を降らせたが被害はほとんどなく、干ばつの解消に役立った。

各地の総降水量は 木頭467mm(187mm)、福原旭445mm(175mm)、徳島213mm(105mm)、坂州340mm(125mm) ()内は日降水量

昭和48年10月13日～14日 強風雨(日本海低気圧)

低気圧が日本海を通過し、県南では風雨が強く海難事故が発生した。13日の日降水量は徳島22mm、日和佐106mm、富岡83mm、川上117mm
14日の徳島最大風速N10.3m/s

昭和48年10月27日～28日 大雨(二つ玉低気圧)

二つ玉低気圧が通過し、27日夜から28日朝にかけて県南部を中心に大雨を降らせた。日降水量 日和佐109mm、穴喰94mm、徳島27mm

昭和48年11月25日 地震

13時25分、和歌山県西部を震源地とする地震があり、引き続き18時19分 和歌山県中部を震源地とする地震があった。震度 和歌山IV、徳島Ⅲ

昭和48年11月29日 大洋デパートの火災

13時20分頃、歳末商戦に入っていた熊本市下通1丁目 大洋デパート(地上8階 一部13階、地下1階)の3階から出火、火煙は階段を伝わって次々と燃え拡がり、8階までの約10,000m²を全焼し、多数の犠牲者を出した。被害を大きくした原因としてスプリンクラーが備え付けられていなかったことや、避難誘導訓練が実施されていない等のデパート側の管理責任が大きな問題となり、以後のデパートの消火体制の在り方がクローズアップされた。

死者103、負傷者109

昭和48年12月7日 大雪(寒波)

寒波の来襲で徳島市内でも雪となり、開設以来最も早い降雪となった。この雪のため山間部においては臨時休校、バスの運休などの措置がとられた。

7日9時の積雪 徳島1cm、鳴門3cm、福原旭12cm、穴吹1cm、池田2cm、一字4cm

昭和48年12月24日 大雪(寒波)

県下は今冬一番の厳しい寒波に見舞われ、24日9時には徳島3cm、穴吹4cm、鳴門3cm、一字17cm、京上13cmの積雪となった。このため、路面は凍結し徳島市周辺では交通渋滞となり、朝の交通は大幅に乱れた。また、山間部では臨時休校、バスの運休が目立った。

昭和48年11月中旬～12月 低温，少雨，異常乾燥

この間，冬型の気圧配置が目立ち，12月の月平均気温は5.5°Cで，開設以来第3位の低温を記録した。また，好天が続いたため降水量は少なく（11月の降水量は平年の34%，12月は平年の20%） 空気が乾燥し火災が続発した。

1974年

〔昭和49年〕

昭和49年1月上旬～中旬 少雨, 異常乾燥

上旬は大陸高気圧におおわれ, 中旬は冬型の気圧配置となったため好天が続き, 12月25日以降 1月20日まで無降水となり, 空気は乾燥し火災が続発した。

昭和49年1月12日 海南町の山火事

異常乾燥の続く中, 正午過ぎ海部郡海南町平井字川又の山林から出火, 火は折りからの強風に煽られ延焼を続け, 14日の18時までに植林杉(3～10年生)70haを含め約100haを焼きつくした。

被害額 約2億円 (海南町役場調べ)

昭和49年2月7日～8日 大雪(寒波)

低気圧が四国沖を通過し寒気が流入したため, 雨は雪に変わり山間部を中心にかなりの積雪をみた。

8日9時までの積雪 京上20cm, 芝生14cm

昭和49年2月12日 寒波

冬型の気圧配置となり, 11日夜から12日朝にかけて徳島市内では2cmの積雪となった。また強い寒気が南下したため気温は下り, 徳島の最低気温は -2.4°C を記録, このため路面は凍結し交通渋滞を招いた。

昭和49年3月10日 黄砂

10日13時から18時頃にかけて, 徳島市内で黄砂を観測した。

昭和49年3月中旬～下旬前半 異常乾燥

冬型の気圧配置と移動性高気圧におおわれて好天が続き, 空気が乾燥したため火災の発生が目立った。中間の平均湿度は54%で平年より15%低かった。

昭和49年3月22日 強風(低気圧)

日本海を発達した低気圧が通過し, 22日未明から午前中にかけて強い風が吹き, 徳島では最大風速 $W14.0\text{m/s}$ が観測された。このため関西汽船の下り便は神戸港で6時間半も立ち往生するなど, 海の足は乱れた。

昭和49年4月 異常乾燥

中旬までは長い周期で天気変化し, 移動性高気圧におおわれることが多かったため, 空気は乾燥し月平均湿度63%で平年より9%低く, 上旬には火災の発生が目立った。

昭和49年4月7日～9日 大雨(低気圧)

低気圧が四国沖を通過し, 県南は大雨となった。総降水量は 穴喰168mm(88mm), 日和佐158mm(88mm), 徳島50mm(33mm)を記録した。()内は日降水量

昭和49年4月7日 たつまき

11時頃, 西祖谷山村でたつまきが発生, 民家の屋根やタバコ乾燥室が吹き飛ばされた。

昭和49年4月21日 強風雨(低気圧)

低気圧が日本海を発達して通過したため風雨が強まり, 沿岸海上では高波を伴ったシケ模様となった。このため海の足は殆んど麻痺し, 鳴門海峡では座礁していた中国の貨物船「建設号」が三つに船体が折れ沈没した。また, 陸上でも牟岐線が一時ストップするなど, ダイヤが混乱した。

昭和49年4月 高温

月初めを除き非常に高温で, 月平均気温は 14.9°C を記録し, 開設以来第3位の高温の月となった。

昭和49年5月9日 伊豆半島沖地震

8時33分頃, 伊豆半島沖を震源とするマグニチュード6.9の地震があった。地震の規模は大きくなかったが, 震源地が伊豆半島南部の海底10kmと浅発直下型の地震であったため局部的に強い地震動が生じ活動層に沿って山崩れ, 崖崩れ等が発生, このため南伊豆町を中心に大きな被害があった。

死者30, 負傷者102, 家屋の全壊134, 半壊240

昭和49年5月26日 降ひょう, 落雷

寒冷前線が通過したため, 午後県下で激しい雷が発生し, 神山町, 山城町などで山林を焼失した。また, 小松島でひょうが降った。

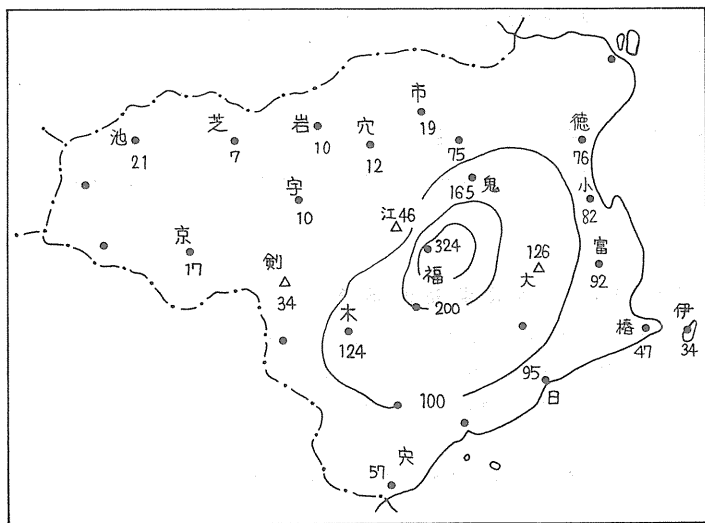
昭和49年6月4日 大雨(寒冷前線)

1,004mbの低気圧が日本海にあってこの低気圧の中心から南西に延びる寒冷前線が4日16時40分ごろ、徳島市付近を通過したが上空には寒気が流入したため大気不安定となり強い雷を伴い、昼ごろから夕方にかけて県東部で強雨となり、特に上勝町福原旭では17時に1時間107mm。日降水量324mmと記録的な雨量を観測した。このため勝浦郡勝浦町・上勝町・名東郡佐那河内村で浸水、山くずれなど、また落雷のため上勝町、小松島市で約1,000戸が停電。鉄道(牟岐線)の一時不通と遅延などの被害が発生した。

被害一覧表

徳島県警調

床上浸水	11むね	山(がけ)くずれ	5カ所
床下浸水	9	橋流失	4
水田流失	2a	堤防決壊	1
道路損壊	4カ所		



雨量分布図

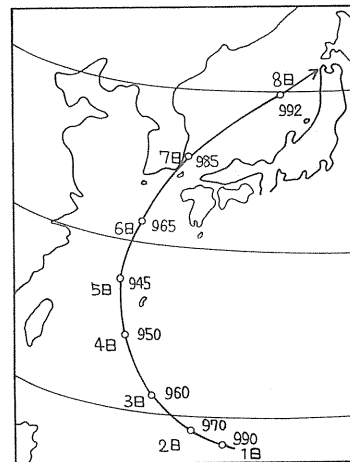
昭和49年6月5日 降ひょう

14時45分頃、板野郡藍住町矢上、勝瑞地区で直径1cmのひょうが約10分間にわたって降り、レンコンの葉に穴があくなどの被害があった。

昭和49年6月17日 大雨(低気圧)

東支那海にあった低気圧が発達しながら日本海を東進、これに伴って南下していた梅雨前線が北上し県下は大雨となった。このため県下では東・西祖谷山村など山間部を中心に土砂崩れ、道路損壊が相次いだ。日降水量 徳島7.2mm, 京上19.2mm, 福原旭16.8mm, 芝生6.6mm

昭和49年7月4日~7日 大雨(台風8号及び梅雨前線)



経路図

マリアナ諸島で発生した熱帯低気圧は西に進み11日、沖の鳥島西方海上で台風8号となった。その後北西に進み4日18時には中心気圧945mbと発達し沖縄と石垣島の間を抜け、時速15kmのゆっくりした速度で東支那海を北上した。6日ごろから次第に勢力を弱め7日未明、朝鮮南東部をかすめ日本海を北東に進んだ。

一方、西日本に停滞していた前線は4日夜、活動が活発となり大雨を降らせ、また、台風の北上に伴い暖湿気流の流入で、6日早朝から7日朝まで長時間にわたって強雨が続き、上賀町小見野々で日降水量953mm、徳島市内で1時間82mmと記録的な雨量を観測した。

このため、家屋の浸水、土砂くずれなど大きな被害が発生した。

極値表

要素 観測所	日降水量の最大値		1時間降水量の最大値		10分間降水量の最大値		総降水量 mm
	mm	起 時	mm	日 時 分	mm	日 時 分	
徳 島	189.5	6日24時まで	32.0	7. 0 1. 40	23.0	7. 0 1. 10	377.5
剣 山	91.0	6日24時まで	27.5	6. 2 1. 30	8.0	6. 2 1. 10	190.0
穴 吹	94.5	6時24時まで	29.0	6. 2 2. 00	9.5	6. 2 1. 20	148.0
日和佐	173.5	6時24時まで	97.0	6. 0 7. 30	25.0	6. 0 7. 00	445.0

被害表 7月8日現在(最終)

徳島県警本部調

負傷者	1名	水田流失, 埋没	397ha	鉄軌道被害	3カ所
家屋全壊	7むね	水田冠水	4,635	通信施設被害	141回線
〃半壊	19	畑流失, 埋没	15	木材流失	500m ³
〃流失	4	畑冠水	1,171	船舶沈没	1隻
床上浸水	704	道路損壊	129カ所	罹災世帯数	939
床下浸水	6,289	橋梁流失	10	罹災者概数	2,992
一部破損	50	堤防決壊	6		
非住家被害	22	山(崖)くずれ	132		

昭和49年7月24日 初の光化学注意報

県は14時30分頃、阿南市・那賀川町・羽ノ浦町に対し、県下で初の光化学注意報を発令し約3時間後に解除した。県公害センターによると阿南市領家町にある環境測定局のテレメーターが14時には光化学オキシダント濃度0.169PPM、また那賀川町の測定局で0.161PPMを記録し、基準の0.15PPMを超えたため、四国電力阿南発電所、神崎製紙富岡工場、日本電工徳島工場の3工場に燃料使用の2%カットを勧告した。

昭和49年7月 多 雨

7月上旬の大雨で、この月の降水量は582.5mmとなり、平年の3倍に当り開設以来第1位の多雨の月となった。

昭和49年8月11日 雷 雨

大気不安定のため強い雷が発生、徳島市内に落雷があり倉庫など2棟が炎上した。また、日和佐町で178mm、大竜寺山で169mmの大雨があった。

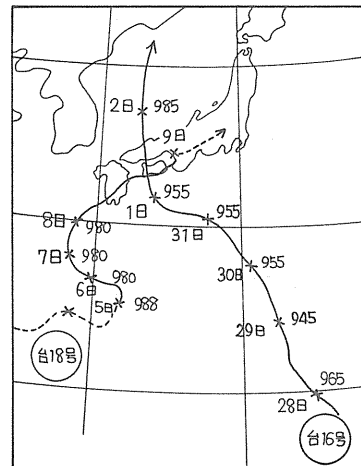
昭和49年8月17日~20日 異常潮位(大潮)

17日から20日かけて大潮に当り、本州の南海上を西進する台風14号の影響もあって、満潮寺の潮位が平常より10~14cm高くなり、19日の早朝小松島市の低地帯で11戸の床下浸水があった。

昭和49年8月25日~27日 大雨(低気圧)

25日、発達した低気圧が四国沖を通過、27日には前線が停滞し大雨となった。25日の日降水量は大山寺144mm、福原旭124mm、小松島70mm、徳島68mm、27日の日降水量は椿泊208mm、富岡92mm、徳島75mm、小松島93mm

昭和49年9月1日 暴風雨(台風16号)



経路図

昭和49年9月1日高知県に上陸した台風16号について

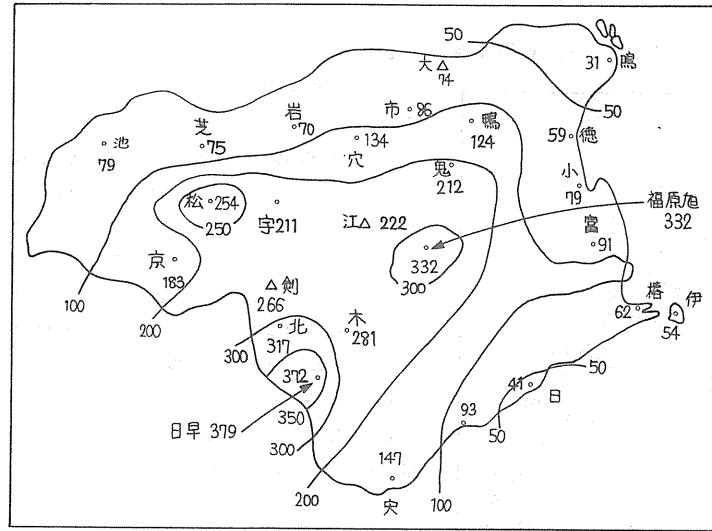
マリアナ諸島東方で発生した弱い熱低は発達して26日21時にはサイパン島付近で台風16号になった。その後、更に発達しながら北西に進み、29日15時ごろ大型の強い台風となり硫黄島付近を通過した。31日朝から西よりに向きを変え、時速20Km位のゆっくりした速さで潮岬沖を西進し、1日6時 足摺岬の南海上で進路を北に変え、18時20分ごろ高知県中土佐町付近に上陸、その後は速度を早めながら四国・中国地方を暴風雨圏に包みながら夜半すぎ日本海に抜けた。

極 値 表

要素 観測所	最低気圧		最大風速		最大瞬間風速		総雨量 mm
	mb	日時分	m/s	日時分	m/s	日時分	
徳島	989.7	1.18.50	SE 17.7	1.19.00	SE 29.3	1.18.40	59.0
剣山 (現地)	782.2	1.18.40	SSE 32.5	1.18.40	SSE 54.1	1.18.32	264.0
穴吹	985.4	1.19.30	NE 12.3	1.16.50			133.5
日和佐	989.8	1.15.20	NE 17.8	1.15.30			40.0

被害表

床下浸水	86むね	道路損壊	1カ所	堤防決壊	2カ所
田冠水	5ha	橋流失	1	山くずれ	3



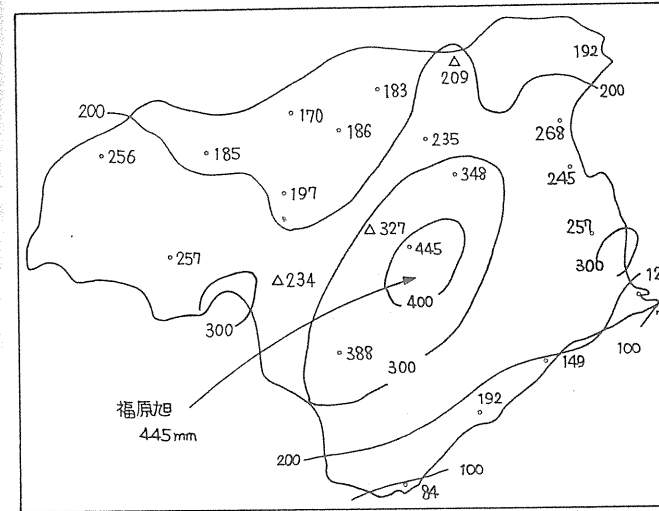
雨量分布図

昭和49年9月8日～9日 大雨(台風18号及び前線)

9月2日、台湾の東海上に発生した弱い熱低は発達しながら東進し、5日3時に南大東島付近で台風18号となった。太平洋高気圧に進路をはばまれ向きを北から西よりに変え、6日には沖縄北方を北西に進んだ。7日には名瀬の西方海上に達し速度が遅くなり、北から北東に転向し加速しながら8日20時10分頃枕崎付近に上陸した。上陸時は中心気圧980mb, 最大風速35m/sであったが次第に衰弱を始め豊後水道を通り9日4時すぎ宇和島市北方に再上陸し、その後、東から南東に向きを変え6時頃、土佐湾に出、温帯低気圧となり東から北東に進み9時すぎには大阪湾に発生した別の低気圧に吸収された。一方、日本海からゆっくり南下してきた前線が四国中部に停滞し、台風に刺激され活動が活発となり、大雨を伴ったため大きな被害が発生した。

被害表

負傷者	1
全壊	12
半壊	12
流失	4
床上浸水	708
床下浸水	5,679
一部破損	10
非住家被害	21
田流失埋没	65
田冠水	2,171
畑流失埋没	4
畑冠水	564
道路損壊	369
橋流失	21
堤防決壊	4
山くずれ	129
鉄道被害	3
通信施設	667
船舶流失	1
罹災世帯	736
罹災者	2,208



雨量分布図

極値表

観測所	最低気圧		最大風速		最大瞬間風速		総雨量 mm
	mb	日時分	m/s	日時分	m/s	日時分	
徳島	1002.7	9.07.26	W 13.3	9.07.50	W 21.6	9.07.43	266.5
剣山 (現地)	796.9	9.06.30	SSE 24.0	9.05.00	SSE 34.9	9.05.02	231.5
穴吹	1004.2	9.06.30	WSW 5.7	9.07.20			185.5
日和佐	1002.2	9.07.00	ENE 9.7	9.06.30			148.5

昭和49年9月27日 大雨(低気圧)

低気圧が四国沖を通過したのに伴い、27日早朝から大雨となり、徳島市内では道路の冠水により7戸が床下浸水の被害にあった。

日降水量 富岡17.4mm, 日和佐12.0mm, 徳島9.4mm

昭和49年10月26日 光化学注意報

県は13時半、阿南市全域に光化学オキシダント注意報を発令、同市内の四工場に燃料使用カットを勧告するなど緊急対策措置をとった。被害はなく1時間半後に注意報は解除された。

昭和49年12月18日 三菱石油(株)水島製作所の流出油事故

18日20時40分頃、岡山県倉敷市の三菱石油(株)水島製油所の貯油所の貯蔵タンカから流出した大量の重油(7,500~9,500kl)は、瀬戸内海沿岸の岡山・香川両県の海域を汚染するとともに、23日には播磨灘と紀伊水道の蒲生田岬に至る本県海域の全域にわたって拡散した。特に鳴門市沿岸部ではスラッジ状の漂着油が約20日間にわたって停滞したためワカメ、ハマチ、ノリの養殖業をはじめ漁業関係の被害は甚大なものとなった。この緊急事態に県は組織を上げて対処するため「三菱石油流出油事故対策本部」を設置し、流出油の回収、清掃、漁業の被害対策等に全力を上げた。被害4県の漁業協同組合連合会と三菱石油(株)との間で妥結した補償額 28億5千万円。

1975年

[昭和50年]

昭和50年1月17日～19日 大雪(寒波)

この冬最強の寒波の来襲で、県西部では17日朝から雪が降ったり止んだり、県北部では18日未明から雪となり各地で交通渋滞し、山間部のバス路線はストップ、山間部の小・中学校は臨時休校した。

各地の積雪は、18日9時に 市場13cm, 岩倉15cm, 穴吹8cm, 鳴門3cm, 池田6cm, 一字2cm, 19日9時には 鬼籠野17cm, 一字13cm, 穴吹10cm, 徳島1cm

昭和50年2月21日～23日 寒波, 大雪

冬型の気圧配置が強まり強い寒波の来襲で、県西部では20日夜から雪となり23日にかけて大雪となった。バスは運休、小・中学校は臨時休校のところがでた。配電線の切断(88か所)、電柱折損1本のため延べ31,400戸が停電した。(四国電力調べ)

21日9時の積雪は 穴吹8cm, 池田11, 徳島1cm, 鴨島6cm, 22日9時の積雪は 穴吹22cm, 岩倉17cm, 池田10cm, 徳島1cm, 鴨島7cm, 京上21cm, 23日9時は 京上33cm, 穴吹10cm

昭和50年3月20 強風, 大雨(低気圧)

低気圧が日本海を発達して通過したため、風雨が強まった。20日10時40分頃、吉野川河口付近でクレーン船(200t)が転覆(7人乗組み)し、1名負傷、1名行方不明となった。海上では風波高く船便の欠航が相次いだ。また鳴門海峡一帯の養殖ワカメが強風のため流失(生ワカメ3,000トン)する等、海産物に被害が出た。

徳島の最大風速SSE13.3 m/s , 日降水量は穴喰100mm(120mm), 木頭82mm(107mm), 徳島53mm(54mm) ()内は総降水量

昭和50年3月30日～31日 黄砂

30日朝から31日午前中にかけて、徳島市内で黄砂を観測した。

昭和50年3月 多照

3月は好天続きのため、月・日照時間は221.6時間と開設以来第4位の多照となった。

昭和50年3月上旬～4月上旬 空気乾燥

3月の月平均湿度は57%と平年より12%低く、空気は乾燥し、火災の発生が目立った。

主な火災 3月11日 2時45分頃徳島市幸町のかまぼこ製造工場から出火、5棟を全半焼。 3月30日夜 那賀川町で母子2人が焼死する火災があった。 31日 阿南市、穴吹町、三加茂町でも火事があり、居宅など6棟全焼。

昭和50年4月2日 おそ雪

冬型の気圧配置となり、県西部の池田町では雪となった。 積雪 0cm

昭和50年4月8日 強風(低気圧)

低気圧が発達しながら日本海を通過したため、8日未明から強まった風波で県沿岸航路は欠航が相次いだ。4時40分頃、鳴門市瀬戸町北泊沖合700～800mの海上で貨物船141tが浸水沈没、原木が流出した。 徳島の最大風速SSE13.8 m/s

昭和50年4月6日・9日・11日 黄砂

昭和50年5月26日 降ひょう, 落雷

上空に寒気が流入し大気不安定となり、昼前から午後にかけて殆んど県下全域で発雷した。落雷のため市場町で1名感電死、送電線断線4か所、トランス焼損3台、停電5,000戸などの被害があった。県北部の吉野川流域及び県南西部(主に穴喰町)では降ひょうを伴い、葉タバコ、スイカ、キュウリなどの農作物631haが被害を受け、被害金額は2億7千万円に及んだ。(5月29日現在 県農林水産部調べ)

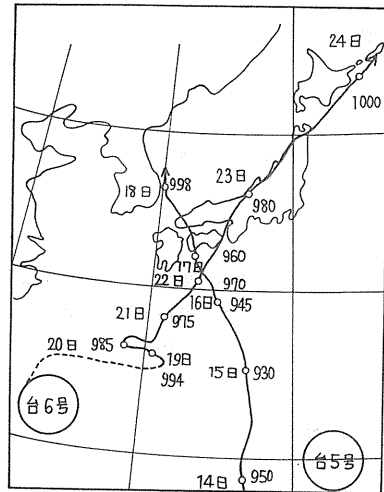
昭和50年6月10日 降ひょう

上空に寒気が流入し大気不安定となり、県内各地で雷が発生。一部で降ひょうを伴ない農作物が被害を受けた。神山町では直径1cm以上のものが14時頃から約30分間降り、地面を一面に白く覆った。葉タバコ64haが被害を受け、被害額は7,318万円となった(県農林水産部調べ)。また、剣山でも直径0.7cmのひょうが13時5分から8分までと14時40分から16時5分まで降った。

昭和50年6月12日 降ひょう

10日に続き12日13時半頃から約10分間、脇町で降ひょうがあり、タバコ7ha, 2百万円の被害が出た。(徳島新聞)

昭和50年8月17日 暴風雨(台風5号)

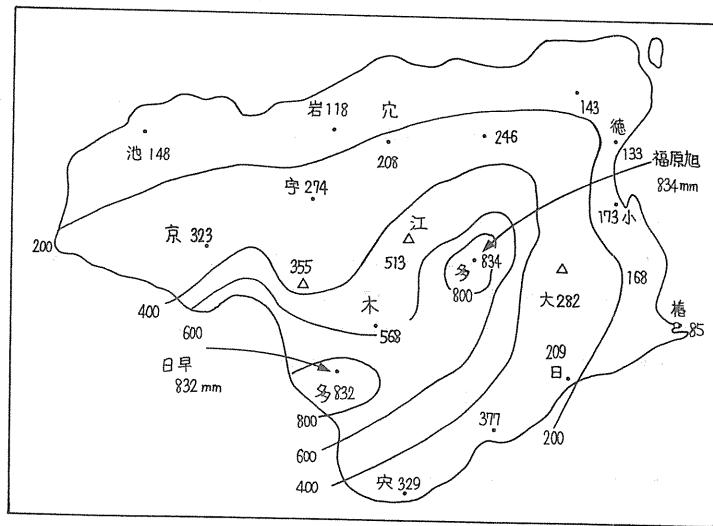


経路図

グアム島の西方海上で発生した弱い熱帯低気圧は、12日15時には発達して台風5号(990 mb)となった。かなり早い速度で北上し硫黄島の西海上に達した。15日3時には大型で非常に強い台風(920 mb)となった。その後衰弱しながら、速度を落して北西に進み、17日8時50分、宿毛市付近に上陸(960 mb)、四国西岸をかすめて昼すぎには伊予灘に入り山口県を縦断した。

被害表 (県警調)

行方不明	1名
床下浸水	31むね
水田冠水	10 ha
道路損壊	3カ所
山がけくずれ	5カ所



雨量分布図

極値表

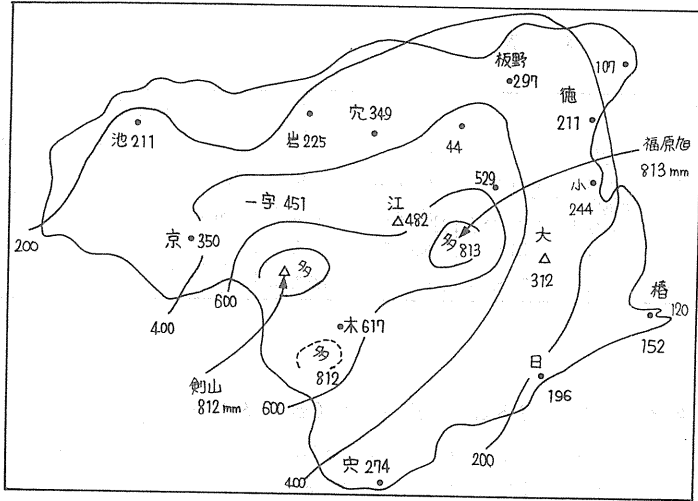
観測所	最低気圧		最大風速		最大瞬間風速		総雨量 mm
	mb	日時分	m/s	日時分	m/s	日時分	
徳島	998.5	17.12.20	SE 16.2	17.10.40	SE 27.4	17.10.20	106.0
剣山	792.1 (現地)	17.11.00	SSE 27.9	17.03.00	SSE 53.4	17.10.32	313.0
穴吹	995.0	17.11.41	NNE 7.8	17.09.00			192.5
日和佐	999.4	17.08.20	NE 15.0	17.07.00			208.5

昭和50年8月22日~23日 暴風雨(台風6号)

台湾の南と台湾海峡で発生した弱い熱帯低気圧は、18日3時沖縄の南海上で合併し、その後も東進を続け、南大東島の南海上に達した19日3時頃から北北西に向きを変え、19日9時 台風6号(994 mb)となった。台風は沖縄付近まで北西進し、そこでUターンする夏型台風の特徴を示し、21日には南大東島付近からゆっくり北東~北北東進し大型で並の台風に発達して(965~970 mb)、23日1時すぎ 徳島東岸を北上、淡路島沿いに進み、5時30分には神戸市西方に上陸したが、この頃から勢力は徐々に弱まり、40~50 kmの速い速度で北陸から東北地方を斜断し、23日23時には太平洋に抜けた。この台風の来襲で県下に大きな被害が発生したが、特に木屋平村、一字村では山(崖)崩れによる多くの犠牲者が出た。

被害表 (県警調)

死者	15	一部破損	214	堤防決壊	13
行方不明	1	非住家被害	87	山がけくずれ	294
負傷者	23	田流失埋没	28	鉄軌道被害	1
全壊	72	田冠水	3,292	通信施設	177
半壊	122	畑流失埋没	20	木材流出	1
流失	43	畑冠水	1,201	ろかい舟	1
床上浸水	1,482	道路損壊	403	罹災世帯	1,719
床下浸水	9,033	橋梁流失	42	罹災者	6,131



雨量分布図

極 値 表

要素 観測所	最低気圧		最大風速		最大瞬間風速		総雨量 mm
	mb	日時分	m/s	日時分	m/s	日時分	
徳 島	971.1	23.0.2.30	E 18.6	23.0.0.50	E 34.7	23.0.0.40	209.5
剣 山 (現地)	774.8	23.0.1.00	NNW3.0	23.0.1.10	NNW4.2.5	23.0.1.0.4	820.0
穴 吹	975.9	23.0.0.50	NE 10.3	22.1.5.30			349.0
日 和 佐	969.5	23.0.0.30	NE 14.3	22.2.3.20			191.0

昭和50年9月 高温(残暑)

太平洋高気圧は根強く、夏型の気圧配置は21日ごろまで解消せず、厳しい残暑が続いた。このため、月平均気温は平年より1.5°C高く、開設以来第3位の高温の月となった。また、大気不安定のため雷の発生が目立ち、9月18日の雷雨では市場町・石井町などで1,400戸が停電した。

昭和50年9月8日 異常潮位

朝の満潮時には大潮と重なり(最高潮位313cm)、小松島市内で9戸が床下浸水、国道・県道の一部が冠水した(被害は徳島新聞)。

昭和50年10月5日 大雨

台風13号が四国はるか南沖を東進したため、徳島で日降水量73mm、日和佐で105mmの大雨があった。徳島の最大風速 NNW 8.2 m/s

この台風の影響により八丈島で最大瞬間風速67.8 m/sを記録し、530戸が全半壊するなど住宅2,000戸に被害があった。

昭和50年10月7日 強風雨

発達した低気圧(2つ玉)の通過で風雨が強まり、牟岐線も一時止まり、海の足も欠航などで乱れた。日和佐日降水量163mm、徳島の最大風速 SSE 14.7 m/s

昭和50年10月 寡照, 高温

10月前半は短い周期で天気変化し、月末には前線が停滞して10月としては珍らしく曇雨天の日が多かった。日照時間は少なく、月日照時間は122.8時間で明治26年以降第3位の寡照の月となり、気温は月平均で平年より1.0°C高く、開設以来第4位の高温の月となった。

昭和50年11月6日~7日 大雨(低気圧)

山陰沖を通過した低気圧のため大雨となり、鳴門市内で床下浸水30戸(県警調べ)の被害があった。

徳島89mm, 鳴門59mm, 小松島115mm

昭和50年11月14日~15日 強風雨(低気圧)

低気圧が四国沖を発達しながら通過したため季節はずれの大雨となり、大雨警報が発表された。

日和佐249mm(日降水量)、徳島の最大風速 SSE 12.4 m/s、崖崩れ1か所(県警調べ)

徳島市、石井町で田畑の冠水500ha、ホウレン草の被害1億6千万円(県調べ)、国鉄牟岐線上下一往復運休、冠水による国道の通行止めなどの被害があった。

昭和50年11月 多雨

降水量は上旬・中旬の大雨のため平年の2.5倍となり、開設以来第3位の多雨の月となった。

1976年

[昭和51年]

昭和51年1月10日～12日 大雪(寒波)

今冬の寒気団の南下で日本海側を中心に厳しい寒波に見舞われたが、県下各地でも雪となり、山間部のバスは麻痺状態となり小・中学校では臨時休校するところが多かった。

10日積雪 穴吹7cm, 池田9cm, 11日の積雪 穴吹7cm, 池田9cm, 徳島2cm, 12日の積雪 京上15cm

昭和51年1月22日～23日 大雪(寒波)

22日から23日にかけての寒波で県西部を中心に断続的に雪が降り、山間部のバスは大きく乱れ、運休などで小・中学校では臨時休校するところがあった。

23日の積雪 穴吹4cm, 京上17cm, 岩倉4cm

昭和51年2月16日 高 波

16日正午すぎ、高波のため潮流測定船が転覆し、2名が行方不明となった。

昭和51年2月22日 強 風 雨(低気圧)

発達した低気圧が四国沖を通り、強風雨となった。このため鳴門市沿岸の養殖ワカメ約1,000トンが流出、被害額は5千万円にのぼった(徳島新聞)。

徳島の最大風速NW11.3m/s(瞬間最大風速NW18.9m/s), 徳島の降水量32.0mm

昭和51年2月28日 強 風 雨(低気圧)

発達した低気圧が日本海を通過したため南寄りの暖気が流入し、春一番となり気温は急上昇した。

徳島の最大風速SSE12.4m/s(瞬間最大風速SSE19.4m/s),

9時日降水量 日和佐148mm(189mm), 穴喰153mm(199mm), 徳島37mm(52mm) ()内は総降水量

昭和51年2月 高 温

2月中旬から下旬にかけて気温が非常に高く、月平均では平年より2.4°C高く(7.8°C)、開設以来第3位の高温の月となった。

昭和51年7月20日頃 大 雨(低気圧)

11日にトラック諸島で台風となり、18日夕方五島列島の南海上で中型ながら強い勢力

を保ち北西進を続けたが、次第に衰弱し、19日16時に988mbとなり、16時30分長崎に上陸、19日23時に熱低となって西進した。この台風が梅雨前線を刺激してその活動が活発となり、19日から20日にかけて大雨となった。徳島の最低気圧1007.5mb, 最大風速7.3m/s, 総雨量285.5mmであった。被害は次の通りである。

床上浸水10, 床下浸水192, 田冠水7ha, 畑6ha, 道路損壊1, 山がけ崩れ6, 罹災世帯10

昭和51年9月8日～13日 大 雨(台風17号と前線による)

9月3日 カロリン群島東部付近に発生した熱低が4日15時台風17号となり、勢力を強めながら北西進し、8日の9時沖の大東島の南々東で最も発達し、中心気圧910mbで最大風速60m/sの大型台風となった。11日の9時鹿児島島の南西約200kmの海上に到達して12日昼頃までその海域に停滞し、台風周辺の降雨帯が日本列島に沿う前線帯を刺激して台風の雨と前線の雨が強まり、大雨となった。台風は13日1時40分長崎付近に上陸し、速度を増し、13日9時浜田の西方100kmに進み、次第に衰弱しながら日本海を北上した。

県下は約7日間雨が続き、各地に記録的な雨量を観測、大きな被害を受けた。徳島の極値最低気圧997.0mb, 最大風速18.7m/s, 最大瞬間風速31.0m/s, 総雨量825.0mm, 剣山1837.5mm, 日和佐475.5mm, 頭村日早(四国電力)では2781mmとなり、これは日本の観測は史上最大の記録であった。

死者10, 負傷者9, 罹災世帯4067, 家屋全壊・流失187, 家屋半壊・一部破損103, 床上浸水3777, 床下浸水16,378, 耕地流失・埋没17ha, 冠水3,962ha, 山・崖崩れ296, 道路損壊708, 橋梁破損15, 堤防148か所, 鉄軌道3か所, 木材流失700m³, その他停電, 国鉄運休等の被害

昭和51年10月30日 酒 田 市 の 大 火

17時50分頃、山形県酒田市中町2丁目の映画館から出た火は、出火場所が繁華街の中心であったことと折りからの強風に煽られ広域に渡り延焼し、戦後の大火の記録では、焼損面積で第8位、焼損棟数で第5位にあたる大惨事となった。この大火は、火災に弱い我が国の都市構造及び強風下における消防力の限界等今後の消防体制に多くの教訓と問題点を残した。

死者1, 重傷10, 軽傷993, 家屋全焼1,739戸, 焼失面積152,105m², 罹災世帯1,023, 罹災者3,300

1977年

〔昭和52年〕

昭和52年2月15日～16日 異常低温(寒波)

15日からの優勢な大陸高気圧の張出しにより寒気団の南下で厳しい寒さとなり、県西部を中心に降雪が断続し、大雪、強風、波浪、異常低温注意報を発令した。16日には徳島の最低気温 -4.6°C 、剣山では開設以来の最低気温 -20.4°C の新記録となった。この寒波により山間部のバスは路面凍結と積雪により大巾に乱れ、学校も臨時休校が続出、水道管の破裂1,200戸(徳島市内)、ガス、電気等の事故続出、農作物の被害も多かった。

昭和52年3月12日 阿波町の山火事

14時15分頃、阿波郡阿波町名東の岡、国指定天然記念物として知られる「阿波の土柱」波濤嶽の麓から出火、火は高歩頂山(標高200m)の中腹から頂上にかけて燃え拡がり、松林など約30haを焼いた。

昭和52年6月28日 大雨(四国南岸B・Fと低気圧)

28日 四国の南岸に停滞する梅雨前線と土佐湾付近に低気圧が発生し、3時20分頃より雨となり海部では総降水量310mmを記録した。

床上浸水1, 床下浸水42, 田冠水205ha, 道路損壊7, 河川損壊7, 崖崩れ22, 鉄道不通1, 罹災世帯1

昭和52年7月17日 大雨(梅雨前線)

山陰沖に北上していた梅雨前線の南下に伴い、17日22時～23時にかけて徳島に集中した大雨があり、10分間降水量21.0mm(7月極値の順位3位, 全年6位), 1時間降水量77.0mm(7月極値の順位2位, 全年5位)を記録した。日降水量は81.5mmであった。各所で道路が冠水した程度で被害はなかった。

昭和52年8月22日 日和佐町の山火事

12時30分頃、海部郡日和佐町山河内字西山の一番谷山(標高560m)の中腹から出火、折りから台風8号の影響による北西 $14\sim 15\text{m/s}$ の強風に煽られ38時間余にわたって延焼を続け、松・杉などの造植林を含め、約92haが焼失した。この間同町消防団はじめ牟岐・由岐両町の消防団などが消火作業に当たったが、強い火勢と急傾斜地のため消火活動が捗らず、県は陸上自衛隊中部方面航空隊にヘリコプターの出動を要請し、県下で初めて空中からの消火剤散布による消火活動を実施した。

被害額 約1億2千万円(日和佐町役場調べ)

昭和52年8月24日 大雨(台風7号)

24日正午頃、台風7号は九州西岸に上陸、九州を横断しその後温低となる。徳島の降水量は79mmの大雨となり被害が出た。なお、この台風による降水量は南部が多く、穴喰では502mmに達した。

家屋半壊1, 床上浸水12, 床下浸水91, 山崩れ4, 道路損壊1, 田冠水100ha,

昭和52年11月12日～17日 大雨(前線と低気圧)

四国の南岸に前線が停滞し、16日には前線を低気圧が通過したので徳島で1,345mmの降雨があった。11月としては異例な降水量で開設以来の記録となった。このため、海空の交通が麻痺した。

1978年

[昭和53年]

昭和53年1月14日 伊豆大島近海地震

12時24分、伊豆大島近海を震源とするマグニチュード7.0の伊豆大島近海地震が発生した。各地の震度は伊豆大島で震度V、下田・静岡・横浜・東京などで震度IVを記録した。このため、地盤の悪い伊豆大島を中心に各所に崩土、落石、土砂崩れが発生、多数の死傷者が出た。

なお、この地震による余震の見通しについて地震予知連絡会から国へその見解が伝えられ、これを受けた静岡県が18日余震情報及びこれに関して県がとるべき措置について公表し県民に注意を呼びかけたが、これが余震発生の予報と誤り伝えられ、一部に混乱が生じるという事件があり、地震情報の問題が今後大きな課題としてクローズアップされた。

死者25、負傷者205、罹災世帯872、罹災者3,447、家屋全壊96、半壊240

昭和53年3月9日～10日 強 風

前線を伴った低気圧が発達しながら日本海を通過したため、徳島で最大瞬間風速SSE 23.2m/sを記録し、鳴門市沿岸のノリ養殖及びワカメ養殖に被害があった。

ノリ養殖	}	施設被害	4千2百万円	ワカメ養殖	}	施設被害	6千9百万円
		生産被害	3億5千万円			生産被害	1億6千1百万円

合計被害額 6億2千2百万円 (県農林水産部調べ)

昭和53年5月下旬 少 雨

帯状の高気圧におおわれて晴天が続き降水量は非常に少なく、旬間降水量は1.5mmであった。これは1891年(明治24年)～1978年(昭和53年)の87年間の旬別少雨記録としては第3位であり、1919年(大正8年)以来の少雨であった。

昭和53年6月12日 宮城県沖地震

夕食の準備時の17時14分、宮城県沖を震源とするマグニチュード7.4の地震が発生した。各地の震度は仙台・大船渡・石巻・福島で震度V、帯広から東京に至る各地で震度IVを記録した。この地震は都市型の地震災害として仙台市を中心に都市機能のすべてにわたって被害を及ぼしたが、被害の特徴として、仙台市の旧市内をとりまく山地の切り盛りによる宅地造成地及び水田の埋立てによる造成地に被害が顕著であったこと及び死傷者の多くがブロック塀、石塀、門柱の下敷により犠牲になったことが上げられる。これらのことから地盤条件及び付帯工作物が防災上極めて重要な問題であることが明らかにされた。

死者28、負傷者1,028、家屋全壊1,383、半壊6,238、

罹災世帯7,778、罹災者29,736

昭和53年6月13日 降 ひ よ う

早朝、美馬郡・三好郡の一部で降ひょうがあり、農作物に被害があった。上空に寒気の流入と寒冷前線の通過により大気不安定となり、徳島で1時20分より発雷があり、3時40分に終わった。

葉タバコ被害	82.6 ha	1億9百30万円 (脇町, 美馬町, 三加茂町)
ハッサク蜜柑被害	30.0 ha	2千百万円 (美馬町, 三野町)
桑被害	2.7 ha	3百万円 (三野町, 三加茂町)
ハウスいちご被害	0.1 ha	80万円 (貞光町)
合 計	115.4 ha	1億3千4百10万円

昭和53年6月15日 大規模地震対策特別措置法制定

昭和51年駿河湾を震源とする東海地震説が発表されたことに対応し、東海地震判定会が設けられたこと及び伊豆大島近海地震が発生し多くの死傷者を出したことを契機として、「大規模地震対策特別措置法」が制定された。この法律の制定により大規模地震の発生のある地域を内閣総理大臣が地震防災強化地域として指定し、その地域に係る地震予知体制の強化等地震防災対策が積極的に図られることとなった。

なお、昭和54年8月7日 東海・関東地方の6県170市町村が強化地域に指定された。

昭和53年6月11日～7月4日 梅 雨

入り 6月11日(平年6月8日より3日遅く、昨年6月7日より4日遅い)

明け 7月4日(平年7月14日より10日早く、昨年7月12日より8日早い)

期間 23日(平年36日より13日短く、昨年35日より12日短い)

出梅が早く期間が短かった。1964年7月1日と1973年7月3日に次いで第3位の早い梅雨明け。また、23日の期間は1964年(20日間)、1967年(22日間)に次いで第3位であった。

昭和53年8月27日 板野町の山火事

13時30分頃、板野郡板野町那東字キビガ谷の雑木林から出火、火は延べ5日間84時間余にわたって燃え続け約110haを焼いた。この間、町は現地に災害対策本部を設置するとともに、自衛隊ヘリコプターによる空中からの消火剤の散布及び県広域消防相互応援協定に基づく隣接消防機関の応援を得て大規模な防衛活動を展開し、民家等への延焼を阻止し

た。

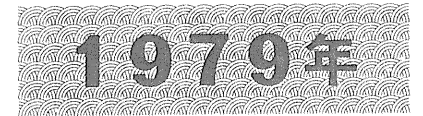
被害額 2千5百万円 (板野西部消防組合調べ)

昭和53年 夏の干ばつ

3月中旬から4月上旬まで寒気の流入で低温が続き、桜は平年より1週間も遅い開花となった。逆に4月中旬からは暖気の進出が強く、初夏並の気温となった日もあり、寒暖の差が大きかった。5月中旬県南で大雨があり、その後太平洋高気圧におおわれて晴天が続き、6月11日梅雨入りとなった(平年より3日早い)。入梅後も太平洋高気圧が強く、早々に梅雨末期のような活動を示し、前線は日本海に停滞することが多かった。そのため全般に高温傾向で経過した。梅雨明けは7月4日(平年より10日早い)、その後高温晴天が続いた。台風8号が8月2日接近したが衰弱し、県南山間部を除いて期待する程の雨量がなく、県北部に干害による被害が多かった。9月上旬ようやく台風、低気圧によって時々降雨があり、干害は次第に解消した。

	7 月		8 月		9 月	
平均気温	27.6	(+ 1.8)	27.7	(+ 0.8)	24.5	(+ 1.0)
最高気温 (平均)	31.7	(+ 2.1)	31.9	(+ 0.6)	28.3	(+ 0.6)
降水量	69.5 ^{mm}	(-125.5)	90.5	(- 78.1)	110.0	(-178.8)
日照	318.4 ^{時間}	(+113.9)	282.4	(+ 41.4)	153.9	(- 16.0)

作物名	被害面積	被害金額
水 稲	645 ha	185百万円
果 樹	1,065	762
野 菜	218	189
そ の 他	1,866	489
計	3,794	1,625百万円



[昭和54年]

昭和54年1月29日 大雨(低気圧)

四国沖を通過した低気圧により季節はずれの大雨となり、徳島の10分間降水量16.0mmは1月の第1位となる。(従来の極値は1950年1月30日の7.0mm)

29日 日降水量 穴喰13.2mm, 福原旭10.1mm, 徳島5.9mm

昭和54年2月 暖冬

2月の月平均気温8.3°C, 平年より2.9°Cも高く、これは1959年(昭和34年)の8.5°Cに次ぐ第2位の高温記録となった。

昭和54年2月23日 大雨

四国地方を東進した低気圧により県南部で大雨となり、日降水量は 穴喰15.4mm, 日和佐13.3mm, 徳島2.0mmであった。

昭和54年3月30日 高温

日本海の低気圧への暖気流入に伴い、徳島の最高気温25.8°C, 3月の第1位となる。(従来の極値は1956年3月25日の24.7°C)

昭和54年4月8日 大雨(前線)

日本海の低気圧から南西にのびる前線に伴う大雨があり、日降水量は 穴喰27.0mm, 福原旭13.9mm, 徳島8.1mmであった。

昭和54年4月9日 異常乾燥

最小湿度 14% (従来の極値14% 1977年4月11日)

昭和54年4月22日 晩霜

移動性高気圧に覆われ、放射冷却により京上で最低気温-1.3°Cを観測、県西部の山間部及び那賀川上流域の一部に霜害があり、茶209ha, 桑74haに被害をうけた。被害額 2億3千5百万円

昭和54年5月26日 降ひょう

上空に強い寒気が流入し、大気が不安定となり昼前から夕方にかけて県南部を除いた各地

にひょうを伴った強い雷が発生、降ひょうにより梨、葉タバコ、スイカ等515haにわたり被害があった。

被害額 6億1千2百万円

昭和54年6月27日~30日 大雨(梅雨前線)

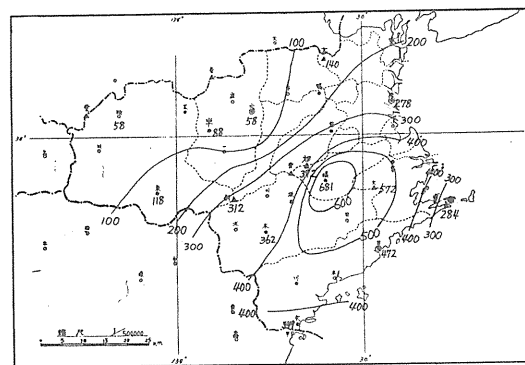
四国地方に停滞した梅雨前線の活動が活発になり、総降水量は 剣山610.5mm, 木頭463mm, 京上438mm, 徳島233.5mmとなり、那賀川上流で死者1名を含め被害は県下各地に及び、被害額は27億5千万円となった。(県調べ)

昭和54年8月23日 降ひょう

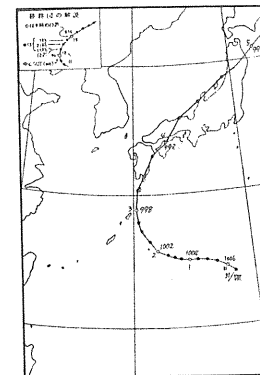
上空に寒気が流入し大気不安定となり、17時30分頃から約40分、名東郡佐那河内村全域で直径2~3cmのひょうが降り、地面を白く覆った。

温州みかん125ha, 被害額2億3千8百万円

昭和54年9月1日~4日 暴風雨(台風12号)



雨量分布図



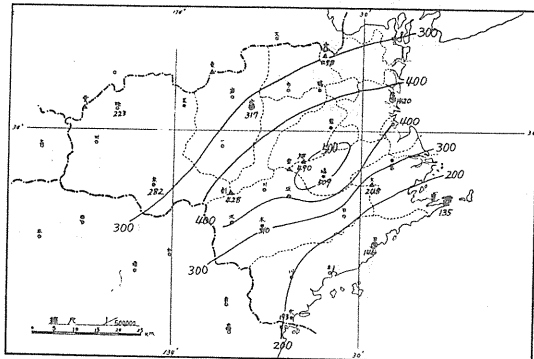
経路図

南大東島の北にあった熱帯性低気圧が急に発達(990mb)し、9月2日18時台風になる。3日21時30分頃、鹿児島県志付志付近に上陸し、その後豊後水道を通り4日6時頃 宇和島市付近に再上陸、四国北西部から玉野市付近を通り、16時には日本海に出て北東に進んだ。徳島で最大風速SSE13.8m/s(4日), 最大瞬間風速SSE25.9m/s(4日)を観測、各地の総降水量は 福原旭68.1mm, 大竜寺57.2mm, 日和佐47.2mm,

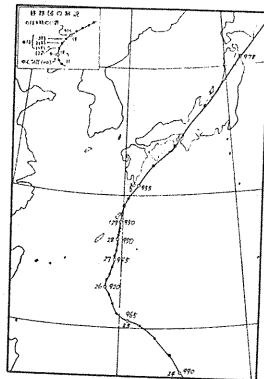
旭丸372mm, 木頭362mm, 穴喰349mm, 徳島278mmとなった。

被害額 12億5千9百万円

昭和54年9月24日～10月1日 暴風雨(前線と台風16号)



雨量分布図



経路図

(1) 前線の概況

24日3時にカムチャッカ半島付近の低気圧の中心から南西にのびる前線が西日本に停滞, 気圧の谷の接近に伴い24日15時頃から前線の活動が活発となり, 徳島の1時間雨量(24日20時～21時)は62mmの強雨となった。25日には移動性高気圧が日本海を南東進するに従い前線の活動も弱まり, 四国の南海上に停滞した。その後, 台風北上に伴い前線も再び北上した。

(2) 台風16号

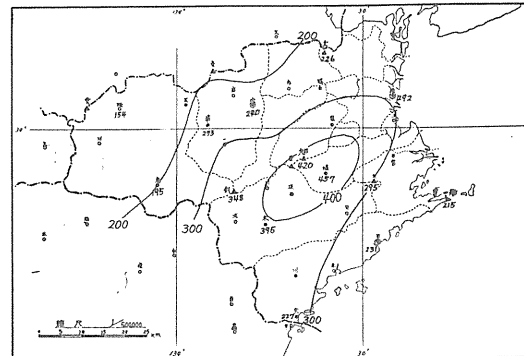
9月21日21時ヤップ島北東海上に熱帯性低気圧が発生, 23日15時台風となる。26日6時沖繩の南南東海上で920mbまで発達, 29日9時奄美大島の南海上で950mbになり北東に転じて加速し, 30日18時室戸岬の西に上陸, 23時大阪市に再上陸し90km/hの速度で東北地方を通過し, 10月1日6時八戸の北で海上に出て15時根室の北で温帯低気圧となった。

徳島では20時40分 最低気圧961.1mb, 最大風速E23.0m/s, 最大瞬間風速E41.2m/sを観測, また20時40分より約10分間風速は2.7m/sと弱くなり, 風向も東から北西に変わり, この間徳島市付近は台風眼の一部に入り, 風の吹き返しが非常に強かった。総降水量は 福原旭509mm, 旭丸490mm, 剣山428mm, 徳島420

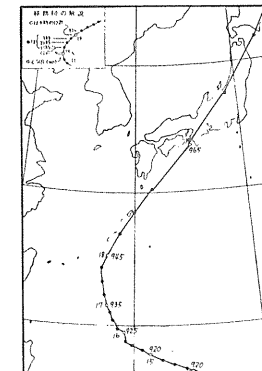
となった。

死者2, 負傷者9, 家屋全壊7, 半壊15, 床上浸水991, 耕地の流失・埋没8ha, 道路損壊98, 耕地冠水3,442ha, 山(崖)崩れ96, 被害額 157億円(県調べ)

昭和54年10月19日 暴風雨(台風20号)



雨量分布図



経路図

10月4日15時 トラック島の東海上で発生, 6日15時に台風となる。その後北西に進みながら勢力を強め, 12日15時には沖の鳥島の南南東600km付近に達し, 中心示度870mbと史上かつてない最低気圧となり, 中心付近の最大風速は70m/sと超大型となった。18日9時那覇の南150kmの海上で東北に向きをかえ, 加速しながら19日6時には足摺岬の南100kmの海上を北東に進み, 9時40分 和歌山県白浜町付近に上陸し, 15時には東北地方へ進んだ。

徳島県下では18時早朝から降雨がはじまり, 総降水量は福原旭457mm, 旭丸430mm, 剣山346mm, 徳島292mmとなり, 那賀川・勝浦川流域が特に多かった。徳島における極値は最低気圧は973.8mb, 最大風速ESE16.7m/s, 最大瞬間風速WWE29.5m/s, であった。18日の徳島の10分間降水量2.5mmは10月の第1位となる。(従来の極値21.8mm, 1942年10月17日)

死者1, 負傷者3, 床上浸水325, 耕地冠水527ha, 道路損壊6, 山(崖)崩れ18, 被害額96億円(県調べ)

昭和54年11月9日～10日 大雨(低気圧)

低気圧が土佐沖を東進したため、大雨となった。

総降水量 木頭223mm, 穴喰198mm, 旭丸193mm, 福原旭186mm,
徳島134mm

1980年

[昭和55年]

昭和55年2月10日～13日 上板・海南町の山火事

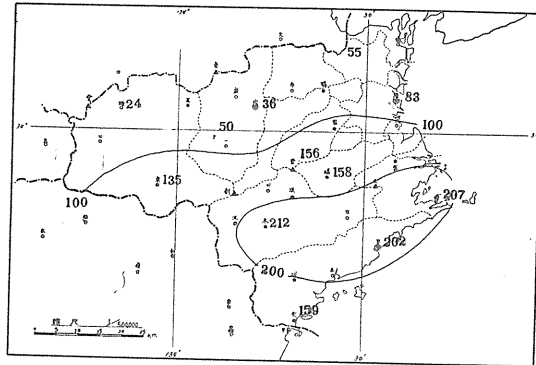
前月終りから優勢な冬型の気圧配置が続き、19日まで全く降雨がなく空気が非常に乾燥した日が続き、10日には板野郡上板町泉谷、13日には海部郡海南町相川で山火事が発生した。損失面積は泉谷2.5ha、相川49.4haにおよんだ。(県調べ)

昭和55年5月2日 晩 霜

移動性高気圧に覆われ、放射冷却による早朝の冷え込みが強く、京上で-0.6℃を観測、県西部及び山間部を中心に茶・桑に晩霜による被害があった。

被害額 1億2千2百万円(県調べ)

昭和55年6月7日～9日 大 雨(梅雨前線)



雨量分布図

梅雨前線の活動が活発となり、県南部を中心に3日間で200～250mmの降雨があり、蒲生田207mm、日和佐202mm、木頭212mmを観測した。また、徳島でも7日に10分間降水量の最大値13.5mmを観測し、6月の極値の順位第5位となった。

昭和55年7月23日 降 ひ よ う

前線の南下に伴い寒気の流入により大気が不安定となり、吉野川中流域沿い(阿波・山川・穴吹・脇・貞光の各町)で直径1～2cmの降ひょうを伴った強い雷雨があり、農作物の一部に被害があった。

被害面積47.98ha、被害金額 2千3百万円(県調べ)

昭和55年7月下旬～8月 異常低温と寡照(不作)

7月下旬より低温傾向となり、日照不足も8月にかけて次第に顕著となった。特に8月上旬の平均気温は24.8℃と40年ぶりの異常な低温を記録。日最高気温の平均は28.5℃と平年に比べ2.8℃低く、また日照時間も102.0時間で平年比42%と異常に少なく、共に開設以来第1位の記録となった。

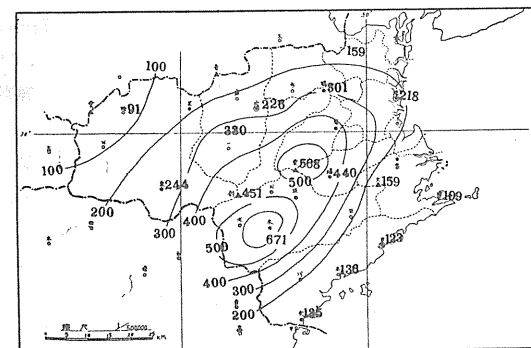
この異常低温と寡照の影響を受け、水稻成育の遅れ、軟弱徒長が目立ち、葉イモチの発生面積約10,000haに達した。このため水稻の作柄は「不良」となり、農作物の中で最も大きな被害を受けた。その他、野菜・果樹・特用作物等の被害もかなり大きく、農作物全体として総額69億1千万円の被害となった。

昭和55年8月16日 静岡駅前ゴールデン街ガス爆発事故

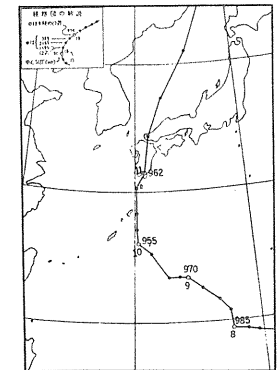
9時30分頃、国鉄静岡駅前のゴールデン街第1中央ビル(地上6階、地下1階)の地下1階でガス爆発が発生、続いて9時56分 同じく第1ビル地上1階から2回目の大爆発が起り、同時に火災が発生した。この爆発で現場付近一帯は火煙と瓦礫の山と化し、200人を越える死傷者が倒れ伏すという大惨状を呈した。この事故は従来から指摘されていた都市の近代化とともに災害も複雑多様化し、損害規模も拡大するというを如実に示したものであり、今後の地下街等における保安対策面に大きな教訓と問題点を残した。

死者15、負傷者223、店舗の全壊43、半壊7、住宅の全壊6、被害額 15億1千万円(静岡県調べ)

昭和55年9月11日 暴 風 雨(台風13号)



雨量分布図



経路図

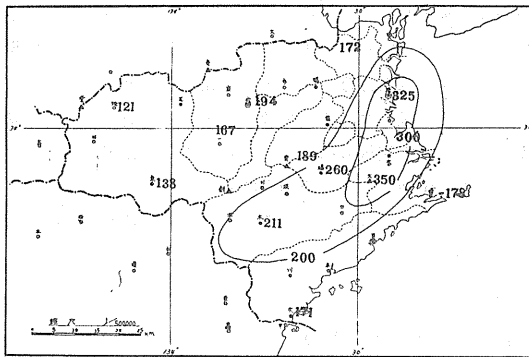
台風13号は11日8時(962mb)九州の大隅半島に上陸し、そのまま北上を続け、九州を縦断し、周防灘を経て11日15時山口県に再上陸、その後、中国地方西部を横断し、日本海に抜け北東進を続けた。

この台風の本県最接近時の中心示度は965mb、徳島における最低気圧989.1mb、最大瞬間風速SSE36.5m/sを11日13時10分にそれぞれ観測した。また雨量は福原地旭丸等県中部山地の南東斜面を中心とする一帯が極端に多く、旭丸では568mm(10日~11日)を観測した。

死者1, 負傷者1, 床下浸水1,072, 山(崖)崩れ36等(県警調べ)

被害額 62億3千6百万円。(県調べ)

昭和55年10月13日~14日 暴風雨(台風19号)



雨量分布図

台風19号は11日9時中心示度925mbで宮古島の東南東の海上を北上し、次第に北北東から東北東に進路をかえ、14日9時には950mbで足摺岬の南150kmの海上を時速50kmで加速しながら東海道沖へと進んだ。

この台風に伴う徳島における最低気圧は、14日14時10分 998.7mb、最大瞬間風速は14日10時20分 N19.1m/sを観測した。

また、総降水量は大竜寺山350mm、徳島325mm、福原旭260mm、木頭211mmとなり、その他の観測所では200mm以下であった。特に徳島の13日の日降水量216.5mmは10月の極値の順位第3位となった。

被害額 6億5千6百万円(県調べ)

徳島平年値(30年平均)

1941~1970年

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	全年
平均気温	5.1	5.4	8.3	13.6	18.0	21.7	25.8	26.9	23.5	17.7	12.7	7.8	15.5
最高気温	9.4	9.8	13.1	18.6	22.8	25.7	29.6	31.3	27.7	22.0	17.1	12.1	19.9
最低気温	1.5	1.6	4.2	9.2	14.0	18.5	22.9	23.7	20.3	14.3	8.9	4.0	11.9
降水量	46.3	53.9	93.5	142.8	148.4	240.7	195.0	168.6	288.8	170.9	92.7	51.7	1,693.3
日照時間	169.2	158.8	182.3	190.6	194.8	154.5	204.5	241.0	168.9	166.1	160.5	158.3	2,149.3

徳島における極値

順位	最高気温(2)	最低気温(1)	最大平均風速(2)	最大瞬間風速(3)	1時間降水量の最大値(4)	日降水量の最大値(1)
1	37.0 1953 8.24	-6.0 1945 2.9	37.8 1941 SE 8.15	≥67.0 1965 SSE 9.10	86.9 1950 9.3	471.5 1891 8.2
2	36.3 1969 8.11	-5.4 1892 1.20	36.7 1934 SE 9.21	49.5 1964 SSE 9.25	85.4 1912 10.2	463.4 1912 10.2
3	36.0 1969 8.12	-5.2 1904 1.27	35.8 1965 SE 9.14	47.0 1941 SE 8.15	84.5 1979 9.30	364.7 1965 9.14
4	35.9 1944 7.16	-5.0 1967 1.16	33.3 1941 SSE 10.1	44.5 1954 SE 9.10	83.0 1972 9.9	306.0 1912 9.22
5	35.6 1970 7.21	-5.0 1936 1.17	32.2 1954 SE 9.14	42.3 1970 SE 8.21	82.0 1974 7.7	289.2 1894 9.10
6	35.6 1942 7.30	-4.9 1963 1.24	32.2 1937 SSE 9.11	41.7 1941 SSE 10.1	77.0 1977 7.17	273.5 1954 7.30
7	35.5 1956 8.4	-4.9 1945 1.17	30.2 1954 SE 9.26	41.2 1979 E 9.30	71.7 1954 7.30	268.5 1907 8.24
8	35.5 1946 7.12	-4.6 1931 1.11	29.8 1964 SSE 9.25	39.7 1954 SE 9.26	66.5 1974 7.6	260.2 1899 9.8
9	35.5 1942 7.23	-4.6 1931 1.10	29.3 1945 SSE 9.17	39.3 1951 SE 10.15	66.0 1970 8.21	250.1 1938 8.1
10	35.4 1969 8.9	-4.4 1895 2.22	29.3 1938 ENE 9.5	38.0 1961 SE 9.16	65.0 1979 9.24	245.8 1892 7.24

	月平均気温の最高値(1)	月平均気温の最低値(1)	月降水量の最大値(1)	月降水量の最小値(1)	7月降水量の最小値(1)	8月降水量の最小値(1)
1	28.6 1923 8	2.4 1945 2	995.1 1965 9	1.3 1939 12	9.6 1893	7.9 1903
2	28.4 1894 8	2.5 1936 1	858.5 1899 9	3.0 1910 12	13.7 1913	10.4 1947
3	28.3 1926 8	2.6 1945 1	835.4 1896 9	3.4 1940 1	33.0 1973	14.1 1926
4	28.3 1922 8	2.7 1963 1	725.3 1945 10	3.6 1929 1	46.5 1942	18.1 1965
5	28.2 1967 8	2.8 1934 1	666.5 1897 9	3.6 1918 1	47.7 1963	21.2 1906

	7月日照時間の最小値(5)	8月日照時間の最小値時間(5)	(注) 統計年数の区分
1	116.9 1957	102.0 1980	(1) 1892 - 1980
2	118.0 1931	159.6 1927	(2) 1929 - 1980
3	132.6 1899	167.3 1920	(3) 1940 - 1980
4	141.1 1953	167.6 1963	(4) 1901 - 1980
5	143.3 1901	170.1 1905	(5) 1893 - 1980